

妙前大塚(3号)古墳

発掘調査報告書

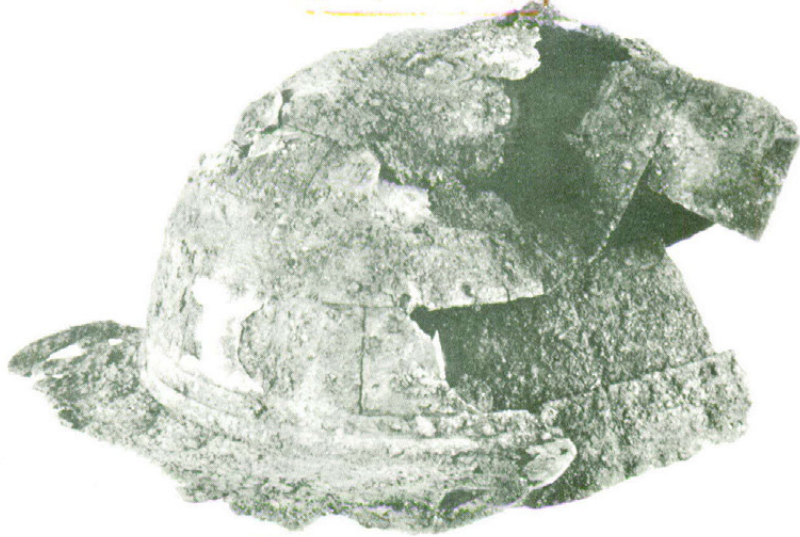
長野県飯田市教育委員会

092.195

My

妙前大塚(3号)古墳

発掘調査報告書



目 次

序	
例 言	
I 環 境	5
II 発掘調査経過	8
III 古墳の外部構造	12
IV 古墳の内部構造	22
V 遺 物	23
VI 埴 輪	39
VII 妙前3号古墳の築造年代	46
VIII ま と め	47
調査組織	48
おわりに	49

挿 図 目 次

図1 妙前3号古墳位置図	5	14 鉄 板	28
2 妙前古墳群図	7	15 (1)大刀 (2)剣と矛	29
3 墳丘測量図	13	16 鉄鏃 №1	33
4 妙前3号古墳墳丘断面図I	14	17 鉄鏃 №2	34
5 妙前3号古墳墳丘断面図II	15	18 鉄鏃 №3他	35
6 葺石測量図	17	19 鉄鏃 平根鏃	36
7 埴輪出土状況	18	20 工具類	38
8 墳頂部平面図	19	21 玉類	38
9 (1)古墳墳頂部平面図	20	22 不明鉄器	39
(2)墳頂部遺物出土状態	21	23 埴輪I	42
10 古墳墳頂部遺物出土状態	24	24 埴輪II	43
11 眉庇付冑	25	25 "	43
12 "	26	26 "	44
13 鉄 板	27	27 "	45

図

- I 墳 丘
- II 発掘スナップ
- III 外部構造

版

- IV 内部構造
- V 遺物の出土状況
- VI 出土遺物



序

飯田下伊那地区内には大小多数の古墳が各地にあって丘上に円頂のまんじゅ型の美しい姿をみる事ができる。殊に天竜川の西側の段丘には、竜丘、松尾、座光寺、高森、松川と点々と古墳が分布している。今回報告することになった妙前古墳は私も何回か見たことのある所謂十六塚といわれる地域にある。この付近はきれいな円墳がいくつも並んで立派なものであった。最近になって畑にするため円形が小さくなったり、円頂が不分明になったり、時代といいながら残念に思っていた。この古墳群のなかで妙前3号古墳は一番目につく大きな古墳であった。最近の住宅その他の建築でこの古墳の周縁にも住宅が建てられ破壊される恐れを生じた。

そこで文化庁・県とも協議し、国の補助事業として発掘調査することにした。

この報告書にあるように立派な古墳で剣、大刀の類、鉄鏃、鈍、殊に珍しい眉庇付冑、その他多数の出土品のあったことからうかがうことができる。この古墳の形や出土品によって五世紀の中ようから後半にかけてのものであるといわれ、当地方の当時の住民の生活、文化を物語る貴重な資料といえることができる。

この発掘に当っては調査団長の大沢和夫氏、調査主任の佐藤甦信氏の苦心と努力、並びにその他の調査員に敬意を表し、県文化課の今村、桐原、神村の各指導主事の御指導に御礼申し上げ、国学院大学の太場磐雄先生、明治大学の太塚初重先生、小林三郎先生の御協力に対して厚く御礼申し上げます。

昭和47年3月

飯 田 教 育 長

矢 亀 勝 俊

例 言

1. 本書は昭和46年度国の補助事業として長野県飯田市松尾妙前3号古墳の発掘調査報告書である。
2. 本書は報告書作成の期限があり、このため一部の遺物については十分な検討がなされない面もあったが、内部構造については大塚初重、小林三郎の両氏が、遺物については大場磐雄、大塚初重、小林三郎の三氏の指導を得た。
3. 執筆は、環境、埴輪、まとめを大沢和夫が、調査経過、外部構造、内部構造、遺物、妙前3号古墳の築造年代を佐藤甦信が分担した。
4. 外部構造、内部構造の図面と、遺物の実測図は金子真士、松田真一、藤野龍宏が製図した。墳頂部平面図、遺物出土状況図の数字は墳頂P点を0とした深さをcmで表わしており、縮尺は図に示してある。
5. 埴輪の実測図は遮那藤麻呂氏の協力を得た。
6. 写真撮影は佐藤が担当し、遺物写真は木下平八郎氏に労をわずらわした。
7. 編集は佐藤があたった。
8. 発掘調査後の古墳は、調査前の姿に近く復原し、保存した。

I 環 境

東に赤石山脈が聳え西に木曾山脈が連なりその中央を天竜川が南流し、両岸に河岸段丘が発達しているのが伊那盆地であり、その中心の都市が城下町飯田である。長野県飯田市松尾(旧松尾村)は天竜川の西岸にあり、幾多の小段丘によって次第に西方に高まっている地帯で、縄文時代の遺跡は比較的少ないが、弥生時代・古墳時代の遺跡は豊富な所である。長野県弥生時代の標準となっている寺所式土器はこの地区より出土したものであり、古墳は面積9 km²の小地域内に65基を有し、特に前方後円墳は御射山獅子塚・おかん塚・天神塚・姫塚・羽場獅子塚・水城獅子塚・代田獅子塚・代田山2号墳の8基をもち、長野県全体より見ても古墳密集地帯である。市村咸人はこれを6集群⁽¹⁾にわけている⁽¹⁾。西方高地群⁽¹²⁾・上溝群⁽¹⁵⁾・妙前群⁽¹⁷⁾・水城群⁽⁷⁾・代田上毛賀群⁽⁵⁾・下毛賀群⁽⁷⁾がそれである。()の中の数字は古墳数。

今回調査した妙前大塚は最大の集群の妙前群の盟主である。

妙前は北に飯田松川が流れ、東は8 m 落差の段丘崖をもって新井大石部落に接し、南は寺所の低地を控えこのあたりは弥生時代遺跡地帯であり、海拔408 mを算する。ここより高い西は羽場金棒の段丘が



図1 妙前3号古墳位置図 (×印) 1:25,000

あり、この高距10mを算し、段丘の端に羽場獅子塚があって妙前を見下している形となっている。妙前はこのようにほぼ東西に連なる台地で妙前原とも言われている。ただ北の松川との高距は2～5mで、かつて松川の侵蝕があまり進んでいなかった時は、羽場獅子塚下あたりは洪水の時には松川の水が妙前原の西を横切って寺所鳥屋場の地区に流れたであろうことは今日の地形よりも、うなづかれるし、時には妙前原全体に松川の水が流れたこともあろうことは土質が砂質である点よりも考え得られる。

妙前原には今日墳丘の明らかな古墳が7基あり古くより注目されていたことは、江戸末期天保年間に松沢義章によって著わされた州羽国古陵記に、

「妙善原ト云フ地ニ十六塚ト云ヒテ塚十六有シカ、何レノ頃カ毀テ六今八十計リ存レルハカリ也。何レモ円ナル塚ニシテ大ナルハ径凡三丈計リ、小ナルハ径二丈余ナリ、此塚ヲ毀タル者子孫ノ絶タルモ有テ今里人等カ云ヒ伝ユルコトモ数アリ」

と記されていることによっても明らかである。

今日妙前原には数基の墳丘をもつ古墳を残しているが、その外に湮滅してしまったものもある。それらを記せば次の如くなる。⁽²⁾

1号墳 大塚の西北50mの地にあり水田中に高さ1.2m、径10mの墳丘が残っていて、今日畑として利用されている。

2号墳 大塚の西20mの地にあり、高さ2mの墳丘であるが、西半分を住宅のため削りとられ半円形を呈している。

3号墳 本古墳であり所在地は飯田市松尾6236番地であるが、詳細は後述する。

4号墳 大塚の東南28mの地にあり、高さ3.5m、1辺20mの方墳らしく見えるが、これは西方より削りとられたためであろう。坊主塚と呼ばれている。里人の言にこの墳丘は土質の関係で木が茂らずに草のみであるからかく名づけたとのこと。畑の中に立っている。

5号墳 4号墳と道を挟んで立っている古墳で、墳丘上には桜・くぬぎなど茂っている。東側に丸山氏墓地があるため形は20×17mの楕円形をなし、高さ4m。須恵器の出土したことを下伊那史は報じている。

6号墳 高さ2.5m、径5mの墳丘をもつ。頂上に雑木が茂り、形はかなり後世に変形させられている。鋤柄一統の墓地で、宝暦11年の日本廻国供養塔その他が建てられてある。

以上3.4.5.6号墳はほぼ一直線にならび、その方向はS50°Eとなっておる。また間隔も30m前後と大体一定している。

7号墳 高さ0.8m、径8m位の低いマウンドが残っている。梅が植えられており、三方が墓地となっている。大正年間に石室が破壊され土師器、須恵器、人骨が発見されたこと下伊那史に記されている。

8号墳 康野氏・小林氏の墓地のあるところでやや小高くなっておるが、付近に古墳石室用と思われる巨石が横たわっている。一部に児童遊園地が設けられてある。

9号墳(庚申塚) 妙前原を東へ下っている道の北側にあり段丘の端に近い。昔はもっと大きかったが、道を拡張する際かなり削りとられたとその地方の人が語る。塚は0.5m位高くなっており、庚申像の碑2、双体道祖神・念仏塔・南無阿弥陀仏(徳本書)等20基以上の石碑が南面して立てられているが、この石碑に古墳の石室の石を利用したものも多いらしい。

10号墳 庚申塚の北方70m、桑が植えられており、中央に小祠があり大きい石の上まつられている。

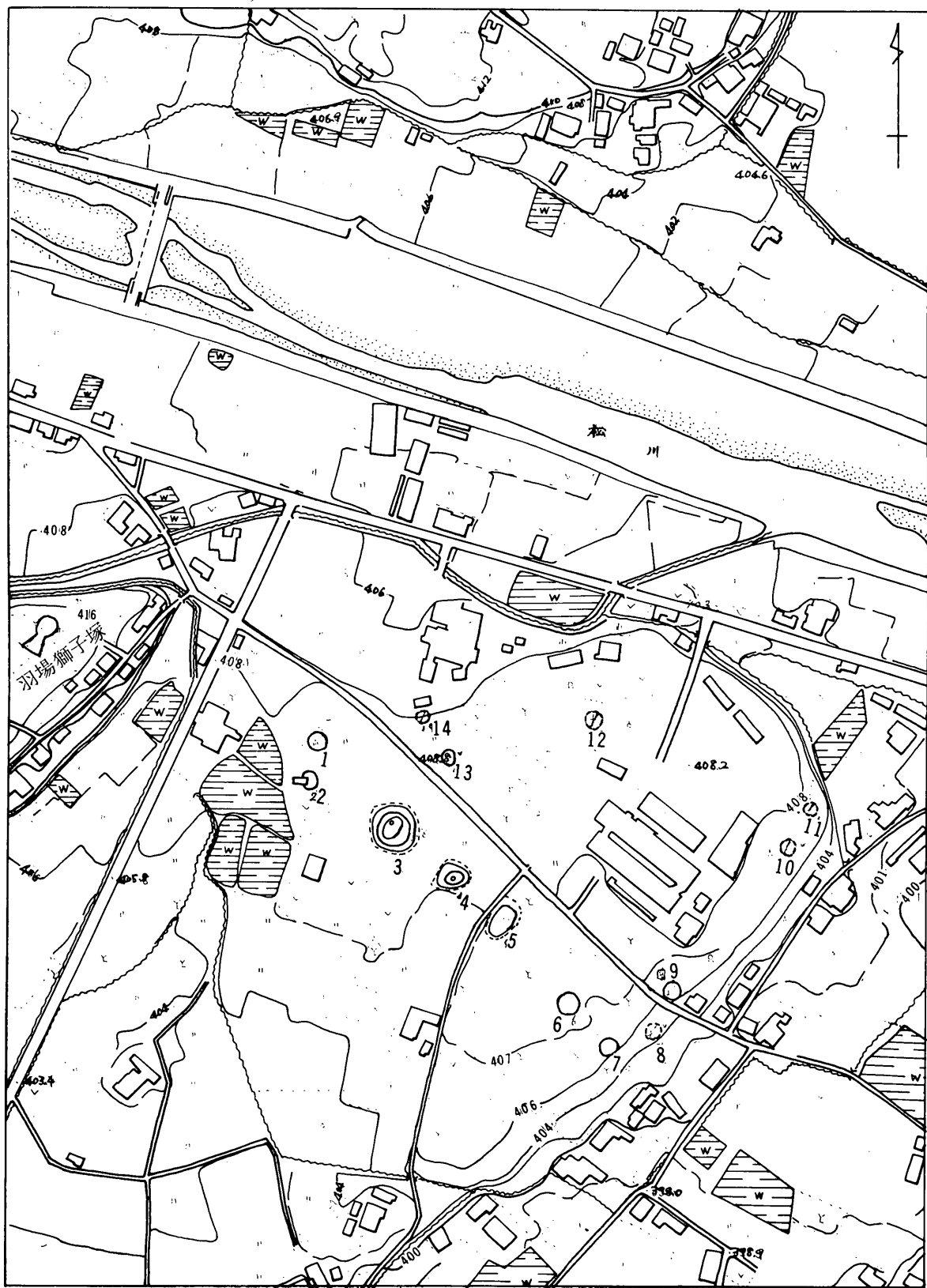


图2 妙前古墳群图



高さ1 m、径13 mの小高い所として残されている。このあたりに墓地が多い。

11号墳 文化11年の梵字の碑の立っている所が古墳址であると下伊那史に記されている。

12号墳 新墓地の一部に馬頭観世音などの石碑が立っている。ここに昔古墳のあったことを土民は語っている。

13号墳 小島洋志氏宅の前の畑中に径2 m位の高まりがあり、その上に桑が生えている。ここより発掘した土師器と須恵器片は松尾小学校に所蔵されているという。

14号墳 飯田屠殺場の塀に接してその南にあった。やや小高くなっておりそこにあった桑を抜いた時鉄刀が出土したという。昭和40年頃塀を作る時この塚は破壊されてしまった。

以上が大塚と同じ面の妙前原に有った古墳であるが、大塚と関係あるものに妙前原より一段高い段丘の端に立つ羽場獅子塚がある。これは大正12年には明らかに前方後円墳の形を示していたが、その後前方部は削平され畑となり後円部⁽³⁾だけとなってしまった。今日径20 m、高さ2.5 mの円墳となり頂上にあべまきの巨木・姫子松が立ち、小祠が祀られている。前方部のあった所は昭和45年より上溝兒童遊園地となっている。東方、北方の眺望の良い所であり葦石らしいものが残っているが、出土遺物のことは聞いてない。或いは未発掘かも知れない。

注1. 下伊那史2巻353頁

注2. 以下筆者の実地踏査と下伊那史2巻とによる。

注3. 下伊那史2巻377頁

II 発掘調査経過

飯田市松尾の松川沿岸の地域は近年都市化が急速に進み、飯田卸売団地の建設をはじめ工場の進出、宅地造成が各所にみられるようになってきている。妙前古墳群のある地域も工場の進出がめだち、住宅建築も進められている。このような現象は妙前古墳群の破壊にとつながるものであり、かつて屠畜場建設では古墳1基が破壊され、妙前2号墳は宅地造成のため、いつの間にかその1部が削りとられている。そして妙前3号墳もその犠牲になるにいたった。

妙前3号墳の所在地がはじめて宅地のため売買されたのは昭和43年である。この8月に買取人の代理者は古墳を破壊して宅地造成するために発掘届を市教委に提出している。市教委はこれに対し書類を一応受理しているが、妙前古墳群の主座として保存するよう要望しているが、地主の強い発掘の要望があったため、再三にわたり地主と県教委社会教育課林茂樹指導主事、市教委、佐藤との間に話し合いがもたれ、地主も発掘調査が簡単に行なわれないことを了解し保存することになった。

しかし、この後古墳所在地は二転、三転と転売され現地主の手に移った。昭和45年には宅地造成がなされ、住宅と作業場が古墳の北側に建築された。この時墳丘の北側の1部は削り採られ、また墳頂近くの東側の1部は開墾され野菜がつくられるようになった。このため葦石が除かれ、埴輪片の多くも掘り出される状態になった。このような状態が続けば、古墳は破壊の一途をたどるとみられた。

このため昭和46年1月県教委は飯田市に対して昭和46年度文化財補助事業計画として発掘調査をすすめるよう指導があり、この線にむかって計画がすすめられ、7月9日には補助事業に対する文化庁の内

定があった。

古墳の周囲は水田のため稲刈後でない調査はできず、11月になって発掘を行なうことを決め発掘調査にあたって飯田市教育委員会と地主小島洋志との間に次のような契約が結ばれた。

飯田市松尾妙前古墳発掘調査記録保存事業に係る契約書

飯田市松尾6236番地妙前古墳（第3号墳）（以下「古墳」という）の埋蔵文化財発掘調査記録保存事業の実施に際し、古墳の保護、保存のため、発掘調査記録保存事業者、飯田市教育委員会（以下「甲」という）と古墳の土地所有者飯田市松尾6238の2番地小島洋志（以下「乙」という）との間に次のように契約する。

記

1. 発掘調査記録保存事業に係る事業費の負担は甲が負う。
 2. 乙は、発掘された出土遺物の処置について、文化財保護法の目的に副い、乙に帰属する埋蔵文化財に関する権利を放棄する。
 3. 乙は、発掘調査以後、古墳の保護、保存について充分留意し、原型を破壊することなく土地利用をはかる。
 4. 乙は、発掘調査以後古墳の土地に係る権利を転貸又は、売却しない。
 5. この契約に定めのない事項又は各条項について疑義を生じた場合は、甲乙協議して定める。
- この契約の締結の証として、本書2通を作成し、甲乙捺印のうえ各自一通を保有する。

昭和46年10月9日

甲 飯田市飯田上2534番地 飯田市役所内
飯田市教育委員会
乙 飯田市松尾6238の2番地 小島洋志

10月14日には古墳の周囲に関係する地主との間に発掘調査協力打合せ会がもたれ、発掘にあたって周囲の土地使内について了解が得られて本格的な準備がすすめられ、11月20日より調査にかかることになった。明治大学文学部史学研究室に学生の応援を依頼したところ、11月19日には金子、松田、藤野の3名が来飯する。

調査日誌

11月20日（晴れ） 墳丘の実測を行なう。市農林課より3名の応援あり。午後、地主の主催する奉告祭を神事で行なう。調査グリッド図を作成、2m×2mのグリッドを墳頂P点を中心に南北、東西に切り、E、S、W、N列とし、墳頂より1、2……列とした。

11月21日（晴れ） 器材運搬、墳丘上の上物除去、テント張りをなし、SE面にグリッドを設定し発掘にとりかかる。S1列はE3より、E1列はS2グリッドより全面の表土を排除していく。S1E4 S4E4、S1E1グリッドに葦石が発見され、各グリッドより埴輪片が検出される。また、上層部より鬼高期の土師器片の僅かと須恵器片1点が中世、近世陶器片と伴出した。

11月22日（晴れ） SE面のS2列を残し全面の表土排除にかかる。大きな木の株があり、掘りとり苦勞する。葦石上には埴輪片が多くみられる。また葦石の間に長芋があり、戦時中開墾して培ったも

のの残りとのことであり、このため葺石の乱れもみられた。

S 1 E 7の墳丘裾部は葺石が急傾斜となり石垣ともみられる。さらにこの下はロームで段がつきE 8グリッドでは砂層の落ちこみがみられ、東にのびていることが確かめられた。

11月23日(晴れ) S E面の葺石の検出、S 4、5、E 6に埴輪片特に多し、E 1列S 5、6、7の葺石は大きな石を用いてあり、葺石もしっかりしており横穴石室の存在も予想された。

S 1列E 3～7グリッドの葺石実測をはじめ。

11月24日(晴れ) S E面の葺石の清掃、写真撮影、S 1列E 3～7グリッドの葺石実測、セクションをとる。午後よりNW面にグリッド設定、調査にかかる。N 1列W 2～7グリッド、W 1列N 2～4グリッドを掘る。墳頂部N 1 W 2でまわりを粘土で固める配石があり、鉄板片が検出され、N 2 W 1グリッドには埴輪片が多くみられ、N 1 W 5～7グリッドに葺石が検出される。

11月25日(晴れ) S E面の葺石実測にかかる。NW面の調査をすすめる。墳頂部に金銅製品が検出、延かともみられた。ついでヤリガンナの完形品、鉄鏃が検出され、墳頂北側には埴輪片が多くみられた。このため墳頂部の調査を後にし、NW面の墳頂部を除く全面の表土排除に力をいれる。

11月26日(晴れ) S E面の葺石実測を続ける。NW面の葺石の検出、葺石は墳頂より1.5m～2m低い地点から裾部にまであり、N 5列より北はかって桑畑となっていたところで葺石は除去されておりN 1列以外には荒れた面が多くみられた。

11月27日(晴れ) S E面の実測を終わり、E 1列の上部セクションをとる。S 2 E 5～7グリッドの未調査部とS E面に続く葺石調査のためN 1 E 2～7グリッドを拡張調査をはじめ。NW面の葺石清掃を終わる。

11月28日(晴くもり) NW面のN 1列の葺石実測、上部セクションをとる。S E面の未調査部とN 1 E 2～7グリッドの拡張部の発掘を終わる。N 1 E 7の墳丘裾部の葺石は急傾斜をもち石積状になる。

前に発見された墳丘東側裾部に続く砂層の落み部の調査にかかり、S 1 E 9～10と掘りすすめる。砂層の落ちこみは緩い傾斜をもち段々に深くなり、E 10では地表下180cmとなり埴輪の流れ込みが多く発見され、さらに深くなって東に続く。

葺石全面撮影のためヤグラを用意し、たてる。

11月29日(くもり雨) 葺石の全面写真撮影をなす。S 5～7 E 1グリッドの葺石をはずし下に掘りすすめるが横穴式石室の存在なし。墳頂部の調査にかかるが雨となり、午後作業中止する。

11月30日(くもり時々小雪) 墳頂部の調査、直刀1口、剣2口、鉄鏃1束(26本)その他鉄鏃の出土をみる。

N 1 Eの拡張部、S 2 E 4～7の葺石実測、S 1列の墳丘東側の落ちこみ部はますます深く、E 10から急に深くなり周惶の存在を確かめる。E列S 4～7グリッドを断面調査のため掘りこみを続ける。

12月1日(晴れ 風強く寒し) 墳頂の調査、直刀1口、剣1口が並んで出土し、鏝1、鉄鏃の出土をみる。周惶の調査はE 11で、地表下270cmとなりなお東に続く。流入とみる埴輪片多し。E 1列の断面調査をすすめる。もとの地表面に周囲の砂を盛り上げ、その上に水成ロームを含む表土を盛り、墳丘を固めつつ構築した過程が解ってくる。S 5 W 2とW 4グリッドを掘りS W面の葺石状態の調査にかかる。

12月2日(晴れ) 墳頂部の調査、北東面よりガラス丸玉、管玉を検出し、墳頂の外周部に埴輪の底部が立った状態で多く出土し、埴輪の配置された位置を確かめることができた。

周惶の調査はE 11の東側で底部が上がっていく状態を確かめられたが、これ以上東側は用地の関係で調

査は断念した。最深部は地表下304cmとなり規模の大きな周溝があったものと推定された。ついでS 1 E 5～7の葦石を除き断面調査にかかる。裾部の急傾斜をもつ石積状の部分には埴輪片がはさまれており、後世に造られたものと判明した。E 1 S 7～8グリッドを断面調査のため掘りさげる。W 4 S 4～6グリッドの調査、葦石は大きな石を用いており、裾部の石は除かれ外周の石垣に使用されていた。

12月3日（晴くもり、午後より時々小雨） 墳頂部調査、鉄板片の多くと平根鍬を検出、両刃の尖根鍬4本が一括して出土する。断面調整のためS軸—E 1 S 4～8グリッド、E軸S 1 E 4～8グリッドの掘りこみを続ける。S軸は深さ3mとなり危険防止のためこれ以上の掘り込みを中止する。

12月4日（晴れ） 墳頂部の調査、鉄斧1個、鉄板片、鉄鍬の多くの出土をみる。上部の石組を清掃する。S軸のセクションをとり、E軸、W軸—N 1 W 5～8グリッドの掘りこみをすすめる。

12月5日（晴れ、くもり）墳頂部上層の石組写真撮影、上層の礫の石組をはずし調査をすすめる。鉄鍬、鉄板片、金銅板の多くを検出する。

E軸、S軸の断面調査、セクションをとる。E 1, 2 S 4～7グリッドに斜に巾1mのトレンチを掘りこみ調査。ES面、SW面に横穴式石室の存在しないことを確認する。

12月6日（くもり、午後雨となる）墳頂部の調査、鉄板片、鉄鍬の出土あり、N軸—W 1 N 3～5の断面調査のため掘り込みを行なう。調査終了のE・S・W軸トレンチ調査部の埋戻し作業を行ない、墳丘周囲に低い石垣をつくり、土の崩れを防ぐ。

12月7日（朝、雪わずかに積る。終日雪荒れ寒し）墳頂部の調査、直刀2口が方向を逆にして重なりこの下に剣が三つ折りにしたのを並べた状態で出土し鉄鍬1束（26本）が検出され、作業終了間近かに眉庇付冑、矛、金銅板が1括発見される。

断割り部の埋戻し作業を続け、ベルトコンベア2台を用意する。

12月8日（くもり、晴、寒し）墳頂部の調査、主体部は河原石を並べ粘土で固めるものとみられるが遺物の出土からみると不明の点が多く詳細に調査を続ける。明治大学小林三郎講師の指導をうける。

墳丘の埋戻し作業、ベルトコンベア2台を使いSE面よりはじめる。

12月9日（晴れ、寒し）墳頂部の調査、眉庇付冑をとり上げる。矛、金銅板、剣の先端部が1括出土、冑の下には埴輪片が1点入っており、出土した地層は黒土で、砂層に穴を掘って埋めたものとみられ、後に移された痕跡をもつ。

判明する主体部の東と西に平行するA・B・直角となるCの巾30cmのトレンチを設け細密な調査にかかる。

SE面の埋戻し作業を続行する。

12月10日（晴れ）墳頂の調査、A、B、Cトレンチと主体部の細密調査を続ける。主体部に鉄片と酸化鉄が検出されるが、トレンチ内よりの遺物は封土築成の際運ばれた弥生期の土器片、打石器である。

NW面にベルトコンベアを移し、墳丘の埋戻し作業を続ける。

12月11日（晴れ）主体部を中心に平行するトレンチ1本、直角に切るトレンチ3本を設け調査、主体部の構造を確かめ、墳頂部の調査を終え、墳頂部の埋戻しにかかる。調査前より52.5cm高さは低くなるが墳丘の復旧を終え、現場における調査を完了し、テント、器材の撤収をなす。

その後、遺物の整理をなし、3月6日に金子、松田、藤野が来飯、3月16日まで遺物の実測図作成をなす。3月15日国学院大学の長嶋磐雄先生が来飯、遺物についての指導を受け報告書作成にかかる。報告書作成段階で明治大学の長嶋初重、小林三郎両先生の指導が得られた。

III 古墳の外部構造

1. 墳丘の現況 (図3)

下伊那史第二巻には「群中(妙前古墳群)最も大規模で殊に目立つ円墳……現存の封土は東西の径23.3m、南北の径30.3m、高さは4.8~6.3m 略々完全なる円形を保有するが、頂上は芝生の小平地となり北面は少し切り崩されて二段となり、南面と西面の裾は欠きとられてそこには土止めの石垣がある。丘の全面は櫟林となり周囲は耕地である。」と記載されている。これは昭和30年前における調査であり、正確な測量によるものではない。

発掘調査時点における墳丘は東西26.6m、南北は北面が宅地造成の際に削りとられて22.5mとなっている。現存部の最大径は29.5mを算す。東軸の調査結果によれば裾部はいったん削りとられて葺石につながる急傾斜の石積みとなっており、西面、南面の石垣も裾部の葺石が除去された状態からみて裾が欠きとられて石垣を積んだものと確認された。

高さは東、南、西の軸では5.07~5.14m、北軸で4.4mを算す。墳頂部は東西10m×南北7mのほぼ楕円形の平地をなすが北東部にはやや小高い部分を残すのからみると墳頂は鋤平されて平らになったものと考えられる。

墳丘上には昭和43年撮影の写真にみられるようにナラの木が繁っていたが、調査前に伐採された。墳頂部には細い木が数本みられたただけであるが、他には大きな木の株が数多く各所に残っていた。

墳丘の復原を試みるならば、削りとられた裾部は1~2.5mは延びるとみられ、高さは調査結果からみると地表下10cmで小礫積みが発見され、遺物の多くも地表下20~30cmに発見された状態からみると1m内外現状より高かったものと考えられる。径30m以上、高さ6m以上の整った円墳であったと推定される。

2. 封土築成の観察 (図4, 5)

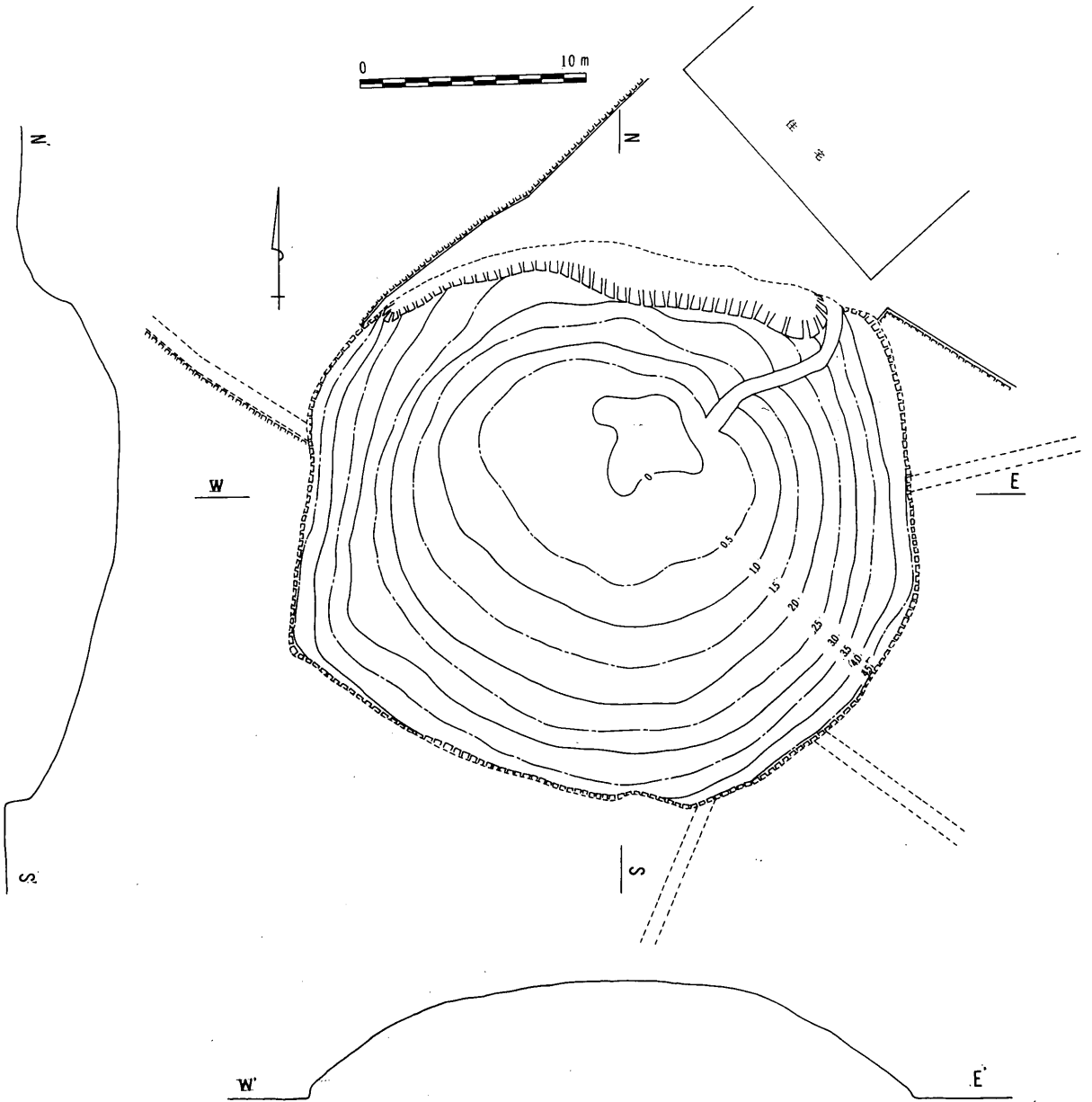
墳丘構築の過程は図4の断面にみるようにもとの地表面より封土を盛り上げたことが確かめられた。墳丘構築前の地層層序をみると、もとの地表面腐蝕土 — 上方は茶褐色、下方は黒褐色で下層の水成ロームとは境界ははっきりせず漸位する。もとの地表の下に二次堆積とみる水成ローム — 下方には小礫を含むがあり、ついで地山とみる砂層となる。白色のさらさらした砂で、松川氾濫堆積とみるものである。

封土築成は墳丘のまわりの第1層の腐蝕土と第2層のロームを最初に盛り上げ、その上に第3層の砂を主体に盛り、この砂の間にロームを含む砂土を盛り、砂の崩れを防止しつつ砂を盛っていく過程をもって墳頂にいたっている。

裾部を観察できたのはE軸でS、W軸は一部の観察にとどまるが根石はみられず裾は水成ロームを堅く固めて第3層の地山を緩い傾斜をもって外部へと掘りこんでいる。約6m続く緩い傾斜は急に深く掘りこまれて深い隴を造っているが、この周隴を掘った土が封土を盛り上げたものである。緩い傾斜は土砂を運搬するに適している。墳丘を構築しつつ同時に周隴が掘られていった過程をみることができる。

墳丘の表面からの地層層序をみると10cm内外の表土があり、この下に砂質の腐蝕土層が20~60cmあって白い砂層となる。この砂層の間にロームを含む腐蝕土、またはロームを含む砂層がバトン状に、

图3 妙前3号古墳墳丘測量図



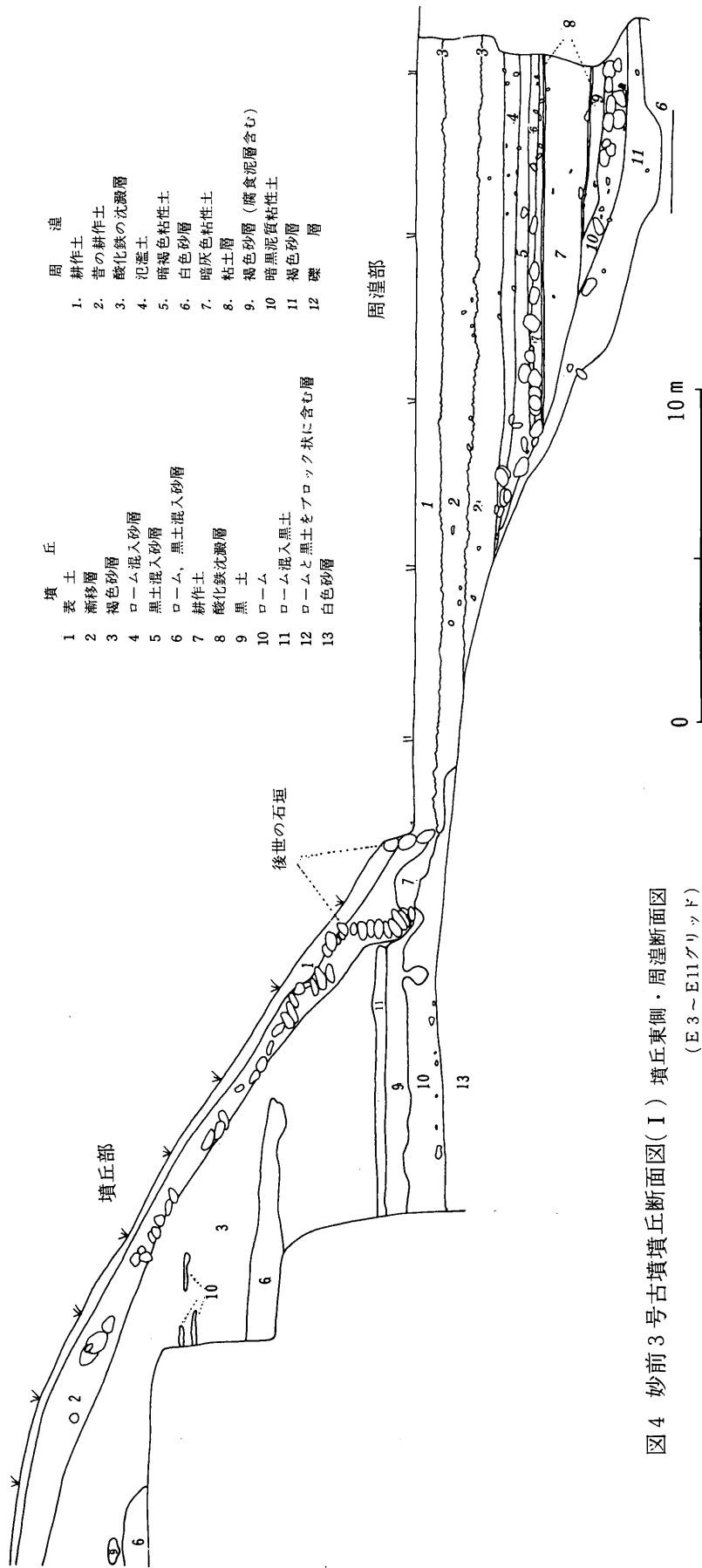
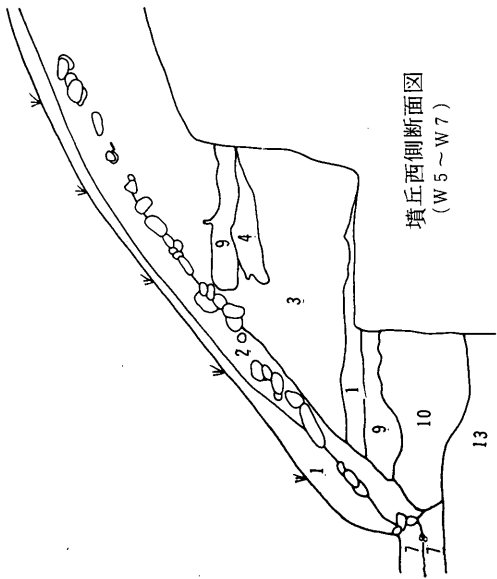
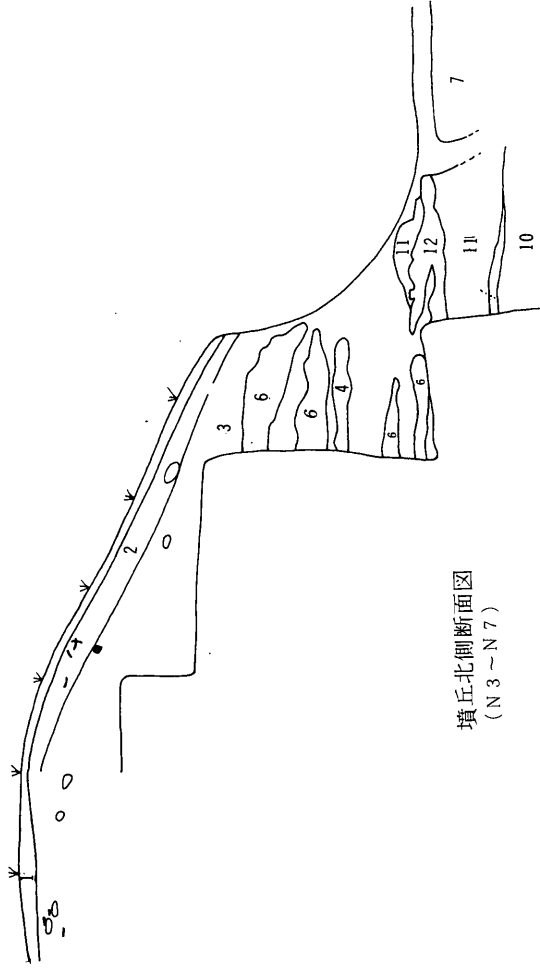


図4 妙前3号古墳墳丘断面図(I) 墳丘東側・周滯断面図

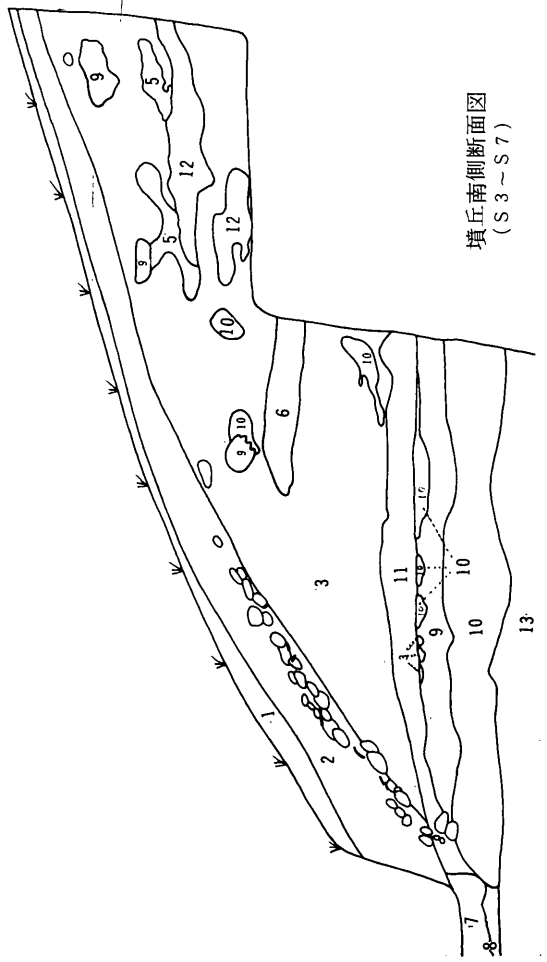
(E3~E11グリッド)



墳丘西側断面図
(W5~W7)



墳丘北側断面図
(N3~N7)



墳丘南側断面図
(S3~S7)



図5 妙前3号古墳墳丘断面図(II)

またはブロック状に何層かに入りこんでいる。この層が裾部近くまで続きローム混入の腐蝕土層となる。この下に僅かに砂層が入って墳丘構築前の地表面となっている。

3. 葦石 (図6)

墳頂との比高1~1.5mの墳丘の傾斜度が強くなる部分から裾部にいたって全面に葦石が敷き詰められたものである。葦石は墳丘面よりの第2層砂質腐蝕土と第3層の砂層との間に—砂層の上に配置されている。葦石は松川より運ばれたとみる川原石で、人頭大以上の石が用いられており、南面の石は特に大きく中には一抱え大のものがぎっしりと敷き詰められ原形をとどめている。

北西面はかつて桑畑となり、葦石の多くが除去され荒らされていた。東南面は戦時中耕作され、長芋がつくられたため葦石の除去された面もみられたがほぼ原形を残していた。

東軸の調査では葦石が裾部で急に傾斜し石垣状をなし問題視したが、埴輪片が間に挿入されており、後の構築と判明した。これは決して新しい石積みでなく、葦石と連続することからみるとこの面の墳丘の修復がなされ葦石を補強したものとも考えられるものがある。

4. 埴輪 (図7)

埴輪片の出土量は極めて多く、その出土状態をみると、1.墳頂部の周囲、2.葦石上、3.周溝の中に集中している。

墳頂部の周囲は墳頂の比高0.5m以内の北西面に、底部が立った状態で発見されたのが多い。南東面、南西面は戦時中の耕作の跡があり、また墳頂部の崩れが認められ、小破片が僅かに検出されたにすぎない。

葦石上には墳頂の比高3mの線上を中心に集中しており、胴上部片が多く、崩れてきた状態を示すものであった。比高2mより上—葦石を敷く面との境より上—には極めて少なく、僅かに小破片を検出したにすぎない。

周溝内よりは東軸のみの調査であるが覆土中から底部にかけて多くの出土をみるが破片の総てに磨滅がみられ、また葦石の転落の間にはさまって発見されたものも多く、明らかに墳丘上よりの流入とみられるものであった。

埴輪の配置された位置は、墳頂の周囲に巡ぐらされたことは、底部の多くが立った状態で発見されたことより推定できる。

埴輪片の出土量からみると墳頂部の周囲に巡らされたとする量的には多すぎると考えられるものがあり、葦石上の墳頂比高3mの線上を中心とする集中度は墳丘中腹に埴輪列の存在を予想させるものがあるが、墳丘断面にみる限りにおいては、その存在の痕跡は認められない。また、埴輪片の多くは胴部から口縁部までで底部は少なく、立った状態のものはなく、上部よりの崩落とみられるものである。

埴輪の配列は墳頂の周囲にのみ巡ぐらされたものと考えられる。

5. 周溝 (図4)

東軸のみの調査で、しかも用地の関係で裾部から8.7m以内で調査を打ち切り、全断面を把握できなかった。墳丘の裾部より約1.5m離れて地山の白色砂層の掘り込み面をもち、緩い傾斜をもって掘りこまれ、掘り込み部から4.8mの地点で溝は傾斜度を強め、7mで最深部にいたり、7.8mで立ち上

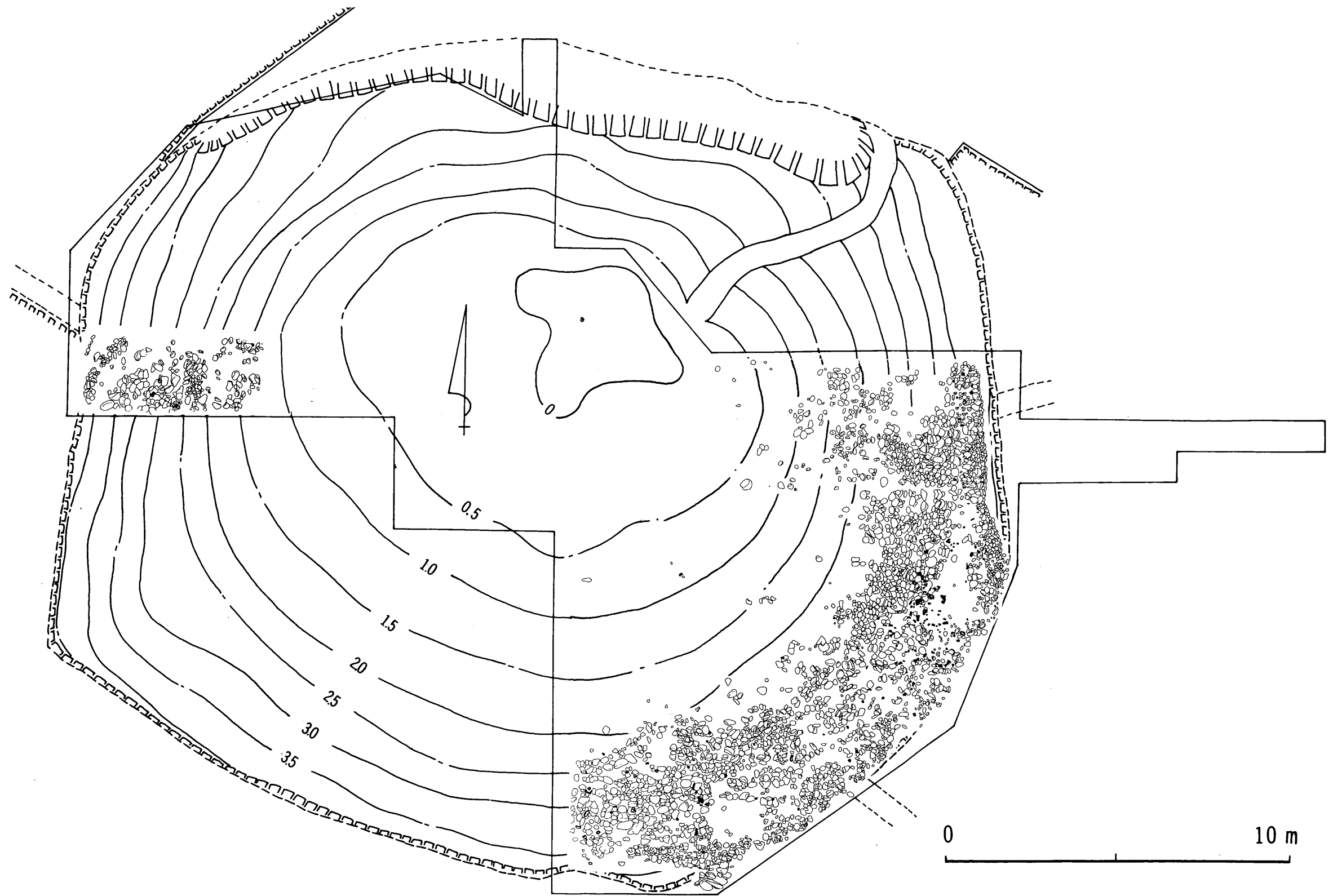


图6 妙前3号古墳葺石測量図

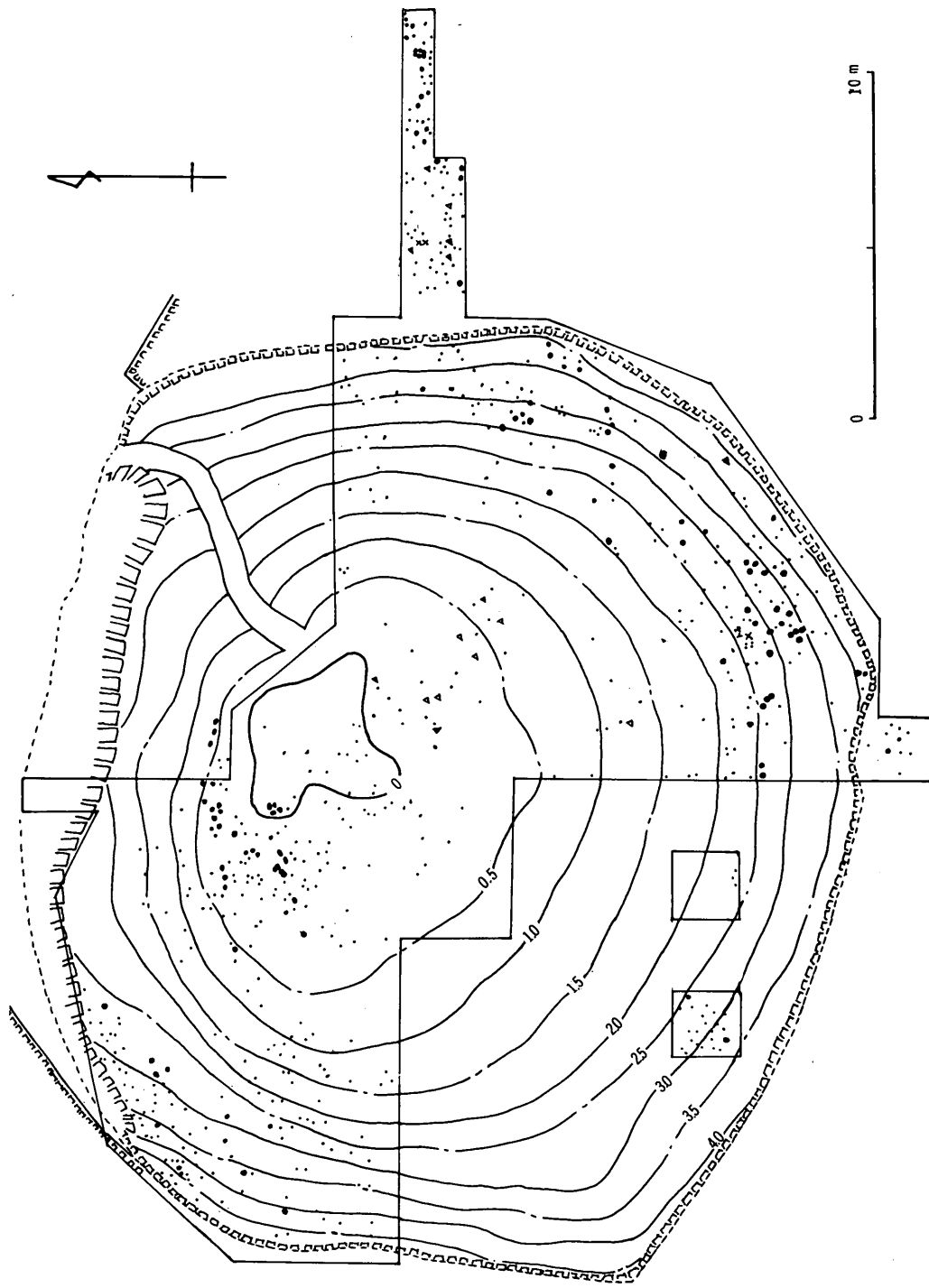


图7 妙前3号古墳埴輪出土状況

がりをみる。

隄の最深部は墳頂より -8.07 m 、現地表面より 3 m を算す。調査範囲の周隄幅は 7.5 m であるが、推定幅は 11 m に達するものとみられる。隄を掘りつつこの土砂を盛って墳丘を構築した過程からみると、周隄は墳丘の全面をとりまいていたものと考えられる。

周隄内の覆土は、数次にわたる松川の氾濫堆積層を示し、この中に大氾濫の際には葦石や封土の崩壊堆積が含まれている。最初の氾濫堆積に葦石、埴輪の崩壊堆積がみられ、古墳構築後、早い時期にすでに墳丘の崩壊がはじまったものと推測される。地層層序よりみて、少なくとも3次にわたる葦石、封土、埴輪の崩壊が行なわれたものと確認された。

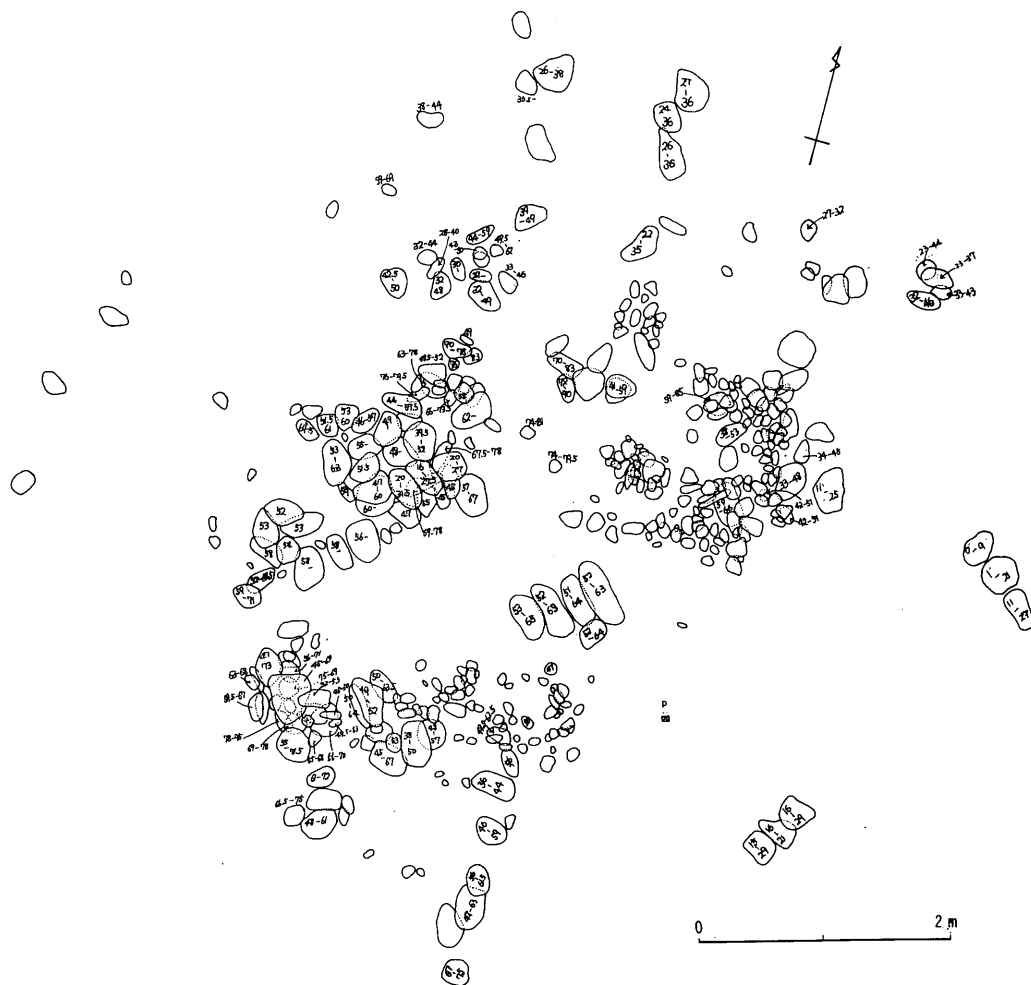


図8 妙前3号古墳墳頂部平面図

例	
◡	埴輪
●	鉄礫
●	鉄片
▲	管玉
▲	ガラス丸玉

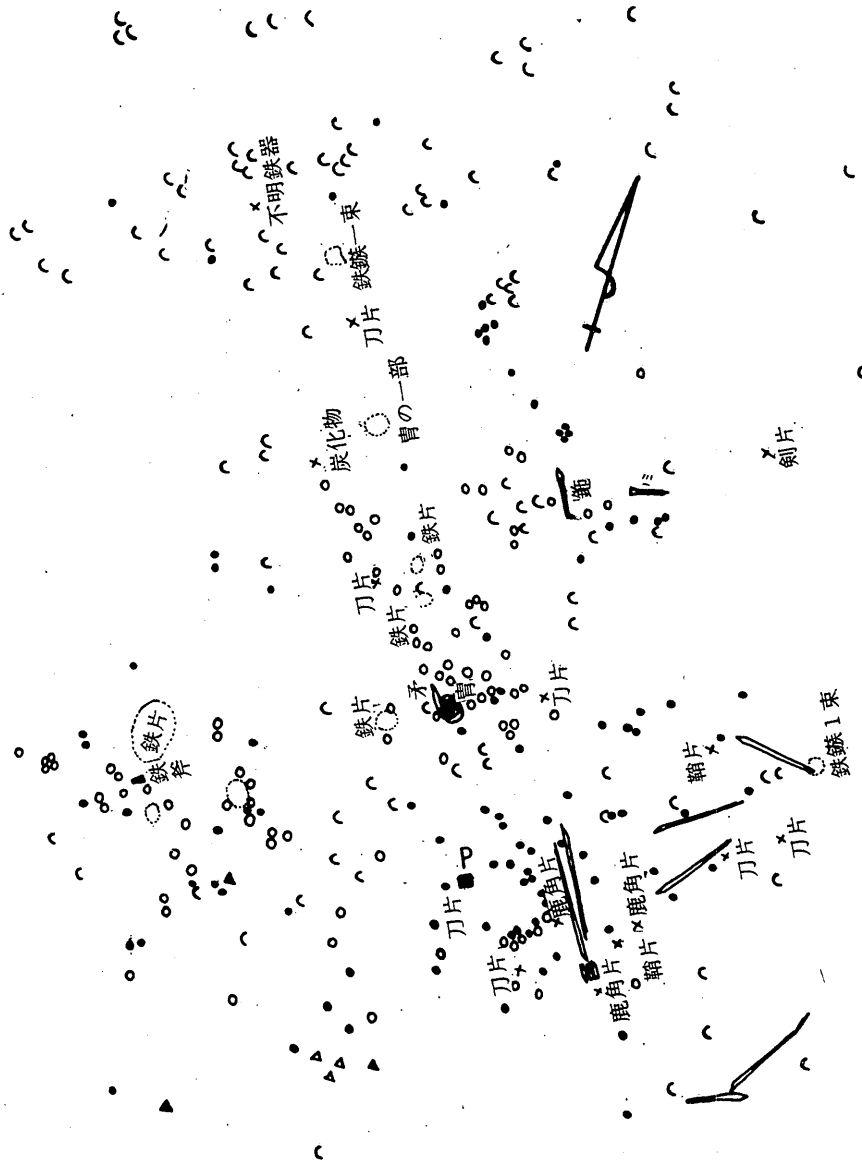


図9の2 妙前3号古墳墳頂部遺物出土状態

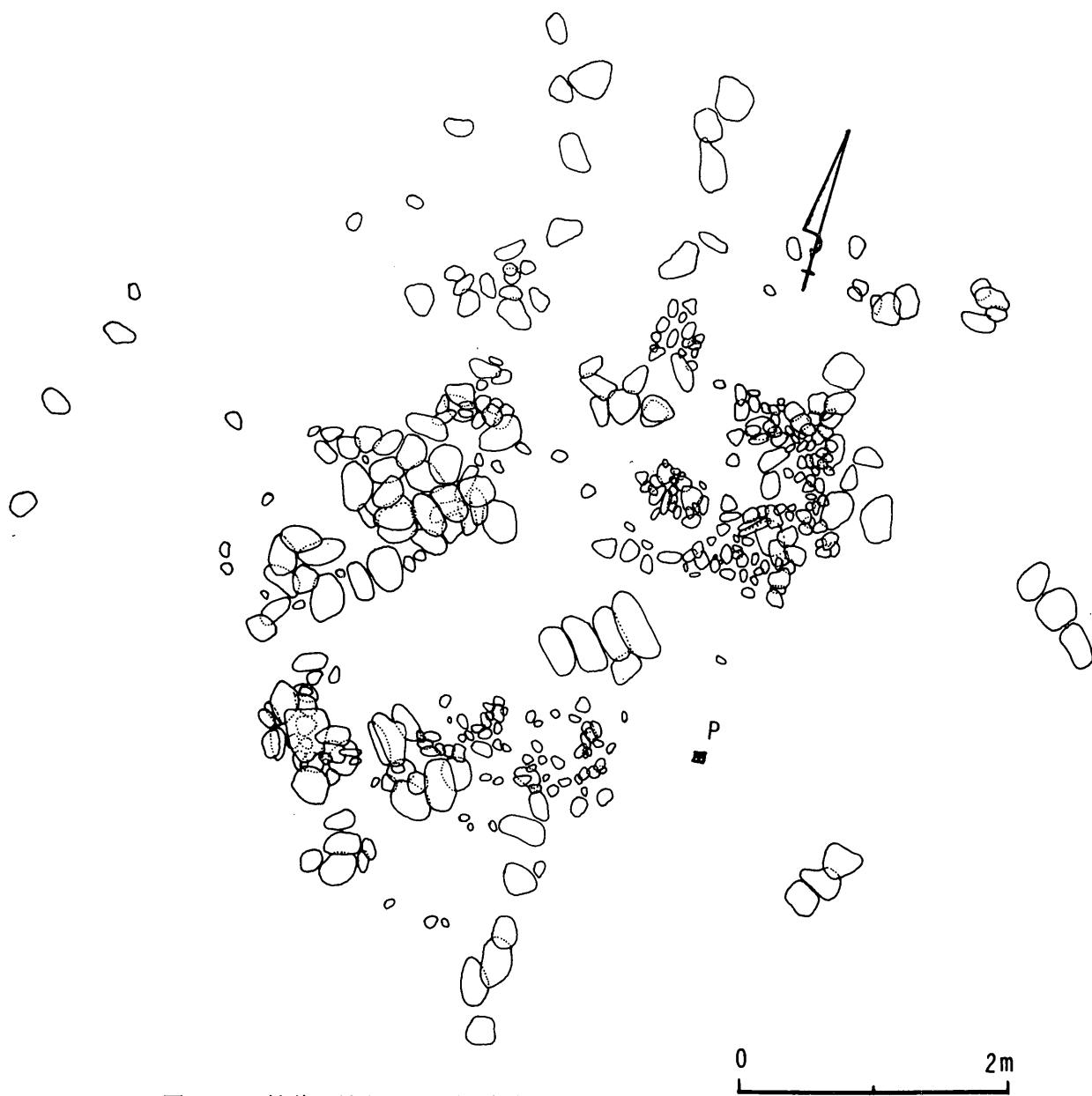


図9の1 妙前3号古墳墳頂部平面図

IV 古墳の内部構造

墳頂の表土を排除した地表下20cmに配石とその周囲を粘土で固める遺構が最初に発見され、その周辺より遺物の出土をみ、主体部の存在を確認したものである。

人頭大以上の川原石の配列と礫積みが部分的に残り、そのまわりを粘土で固めた状態を残すものである。主軸方向N44°E、5.2m×1~1.3mの長方楕円形をなす。内部の床面には粘土は僅かに検出されたのみであり、また礫を敷いた痕跡もなく、周囲を粘土で固めている。

残存部よりみて粘土と礫による柵をもったものと推定されるが、その確証を把握するにいたらなかった。

遺物の出土状況(図9)からみると残存する主体部に属するとみる工具を主体とする遺物の配置と、これと直角に交差する武具を主体とする配列がみられる。この遺物出土状態は残存する主体部Iに直角に交差して木棺直葬が後に行なわれたものとみるが妥当であろう。

遺物の散乱は墳頂部の崩壊、ある時期における盗掘、墳頂部の耕作等によるものと推定される。眉庇付冑に例をとるならば、冑の主体は明らかに後に移動して埋られたもので、深さ1mの穴が掘られ、矛と鍔の1部が一括して埋られ、この下に埴輪片がはいっていた。鍔の大部分は短剣と共に1.3m北に埋られ、冑の胴巻の帯状金銅板は2m北西の表土下に置かれていた。

鉄鍔のNo.1の束は26本の出土をみるが、上部での方向性は一定しておらず、動かされた形跡がうかがわれる。玉類は主体部Iの南東側に散乱した状態で出土をみており、主体部Iの崩壊による飛散と受けとめられる。鍔とみる鉄板片の出土も散乱した状態であった。

粘土と礫による柵をもつとみる主体部Iと木棺直葬によるとみる主体部IIの二者の属する遺物についてははっきりと区別しがたいが、前者が工具と玉類を、後者が武具を主体とするものとの見方が、遺物の出土状態からみて成り立つのではなかろうか。

V 遺 物 (図10)

1. 眉庇付冑 (図11, 12, 13, 14)

冑主体部、胴巻部の帯状金銅板、鋳部が3ヶ所に別れて出土しており、冑主体部は明らかに後に埋めかえられたとみる穴を掘り、埴輪片がこの下から出土している。このため埋葬主体部ⅠまたはⅡに属するものかは不明であるが主体部ⅠのものがⅡの埋葬時に動いたものとも考えたい。

推定高さ20cm、鉢の径20.2cm、眉庇部をいれると28.3cmを算す。前後と両側に金銅が張られる四方白鉄地金銅装小札鋳留眉庇付冑である。地板第一、第二ともに14板ずつの小札で鋳留になっている。腰巻、胴巻は2板の鉄板を側面で鋳留めしており、胴巻は一条の帯状金銅板を貼付して飾る。この鉄地に付着する際、鋳頭を利用して固定する方式をとらず、鋳頭の圧力を利用して固定しているとみられる。

伏板の中心に鋳で鉄板が止めてあり、鉄板の1部は上にめくれた状態になっている。伏板の上に伏鉢を取りつけた痕跡はみられないが、他の出土例⁽¹⁾を考慮して図上復原を試みた。管は鉄板を巻いた上に金銅板を巻きつけている。受鉢はつぶれており、厚さ1mm余の金銅製で鉄地は用いていない。縁の折り返しは形を整えるためのものと思われる。

眉庇には三角形の透彫が両側に、前面部には欠落して不明であるが何らかの形の透彫が推定される。

金銅は小札に巻きつけるのではなく、胴巻と腰巻、または伏鉢の間にはさみつけられるだけで、鋳留めによるものはない。地板の小札には黒漆、麻布の付着を残すものがみられ、金銅装以外は黒漆を塗⁽²⁾って飾られたものとみる。黒漆を塗る意義は装飾、接着、補強、錆止めであり、鉄地に漆の接着を良好にするための布を張り、漆を塗る手法がとられる。さらに金銅板には漆の上に厚さの調整と補強のため麻の繊維を付着させ金銅板を張りつける製作過程がとられる。金銅板の裏側に麻の繊維の残存がみられている。

鋳部の残片は図12の1～8と鋳右袖と、鋳と推定される鉄板片(図13, 14)がある。

1は鋳の重なりを知るものであり、上部は黒漆で下が金銅張りとなり、鋳留めになっている。

8は黒漆で上部は皮が張られ、綴り糸が残り、2～3本の糸をよって1本にしてとじている。鋳右袖はほぼ原形をとどめ、金銅装で金銅板は裏側に折り曲げられている。鋳は5段重ねとみられ、この下に袖部が付き、黒漆、金銅装と交互になるものと推定される。

9, 10は冑の一括資料中に含まれて出土した鉄板片であり、9は用途不明、10はせめ金具の残片と思われるものである。

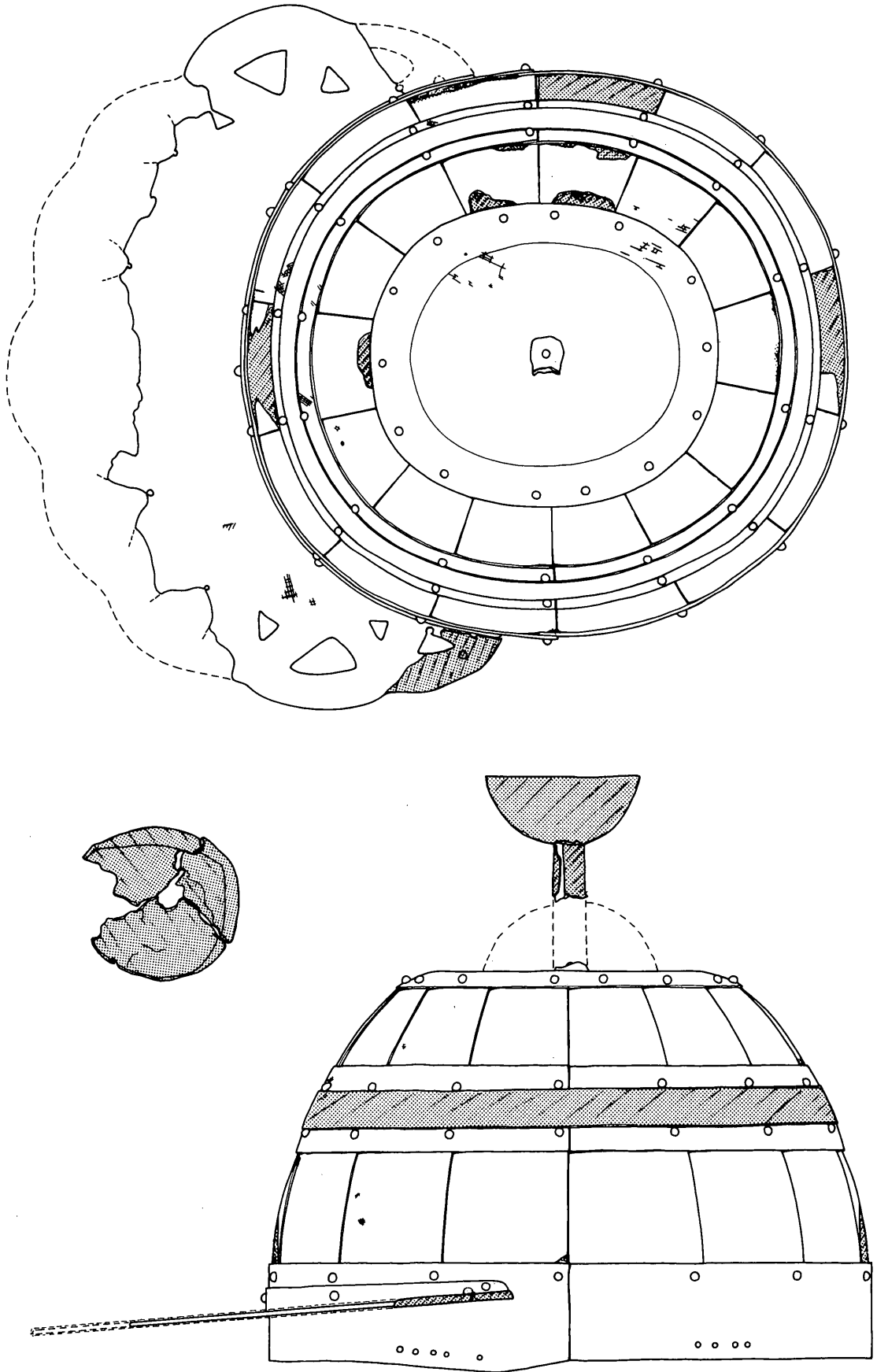
鉄板片(図13, 14)の復原は不十分な段階であるが鉄板は横のカーブをもち、綴孔をもつ。鉄板は2.5cm～3.5cmと巾の狭いものと広いものがあり、2孔の間隔は1cm、1.5cm、また1孔のみがある。黒漆の遺存がみられるものがある。鉄板を量的にみると短甲には少なすぎ、また巾も狭い。鋳の金銅装の巾からみると5段重ねとなると巾は広くなりすぎ残存枚数も少ない。金銅装の間になる鉄板は、巾の狭い部分を用いたとみると量的にも鋳巾からみて妥当なものとなり、横のカーブを考えると鋳部⁽³⁾とみる考えが強くなるものである。

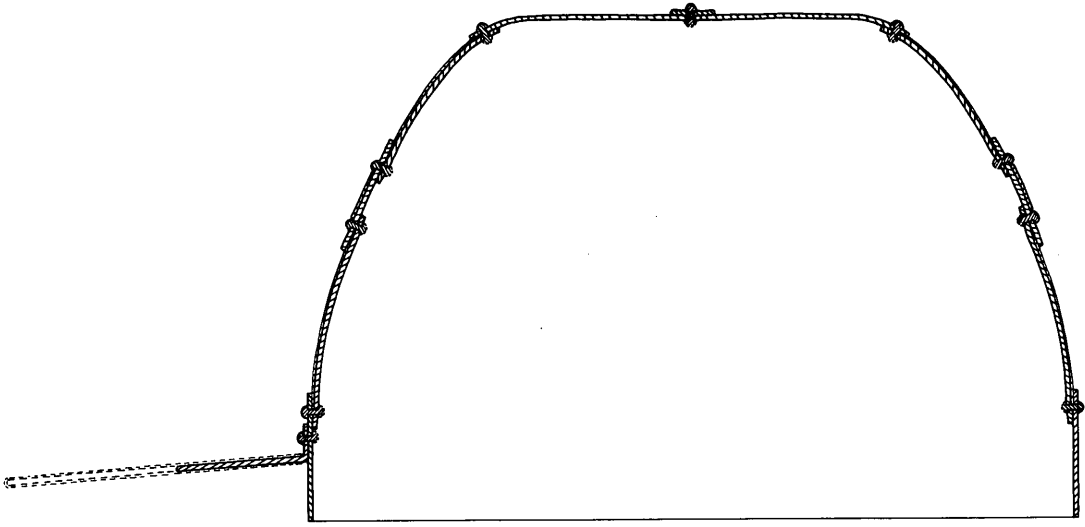


図10 妙前3号古墳墳頂部遺物出土状態

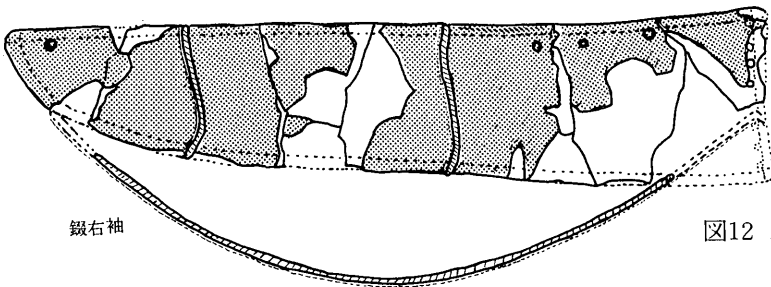
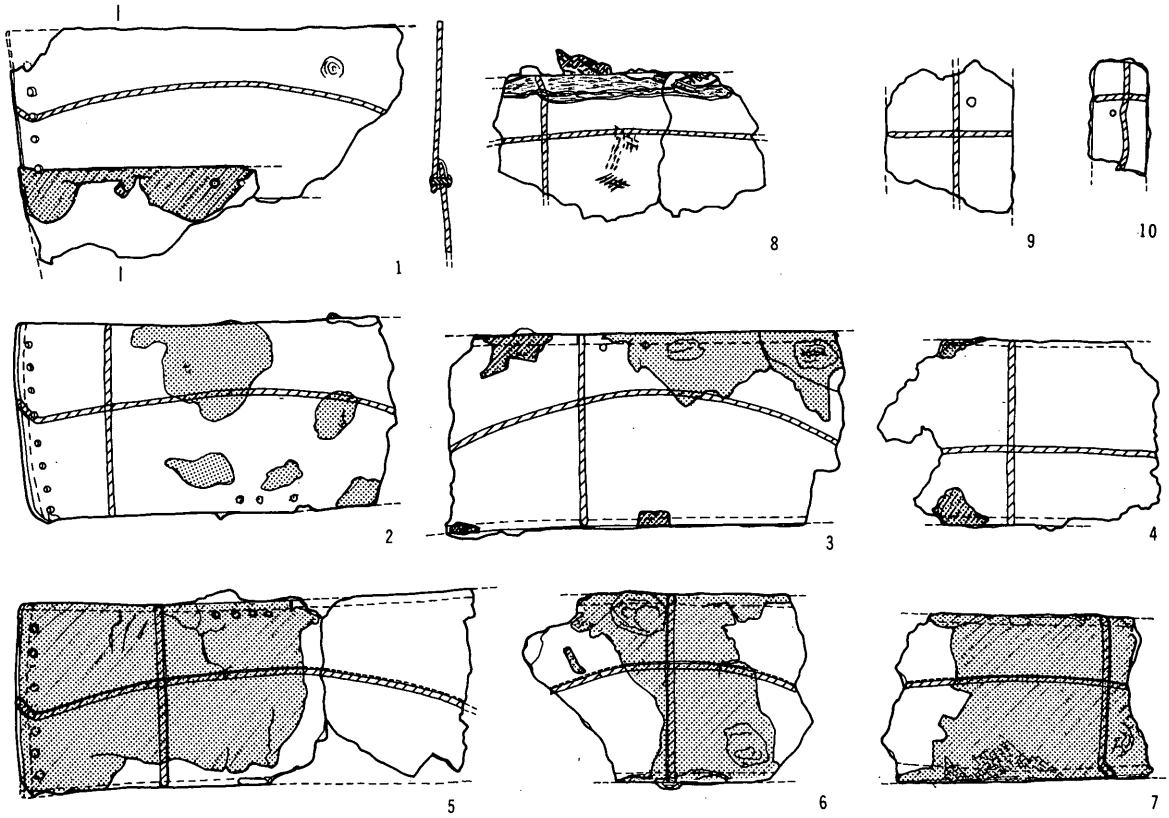
例	
●	鉄鏃
○	鉄片
△	ガラス丸玉
■	管玉
▨	埴輪片
X	その他

图11 眉庇付冑 (1:2)





眉庇付冑断面図(1:2)



鍛右袖

図12 眉庇付冑 (1:2)

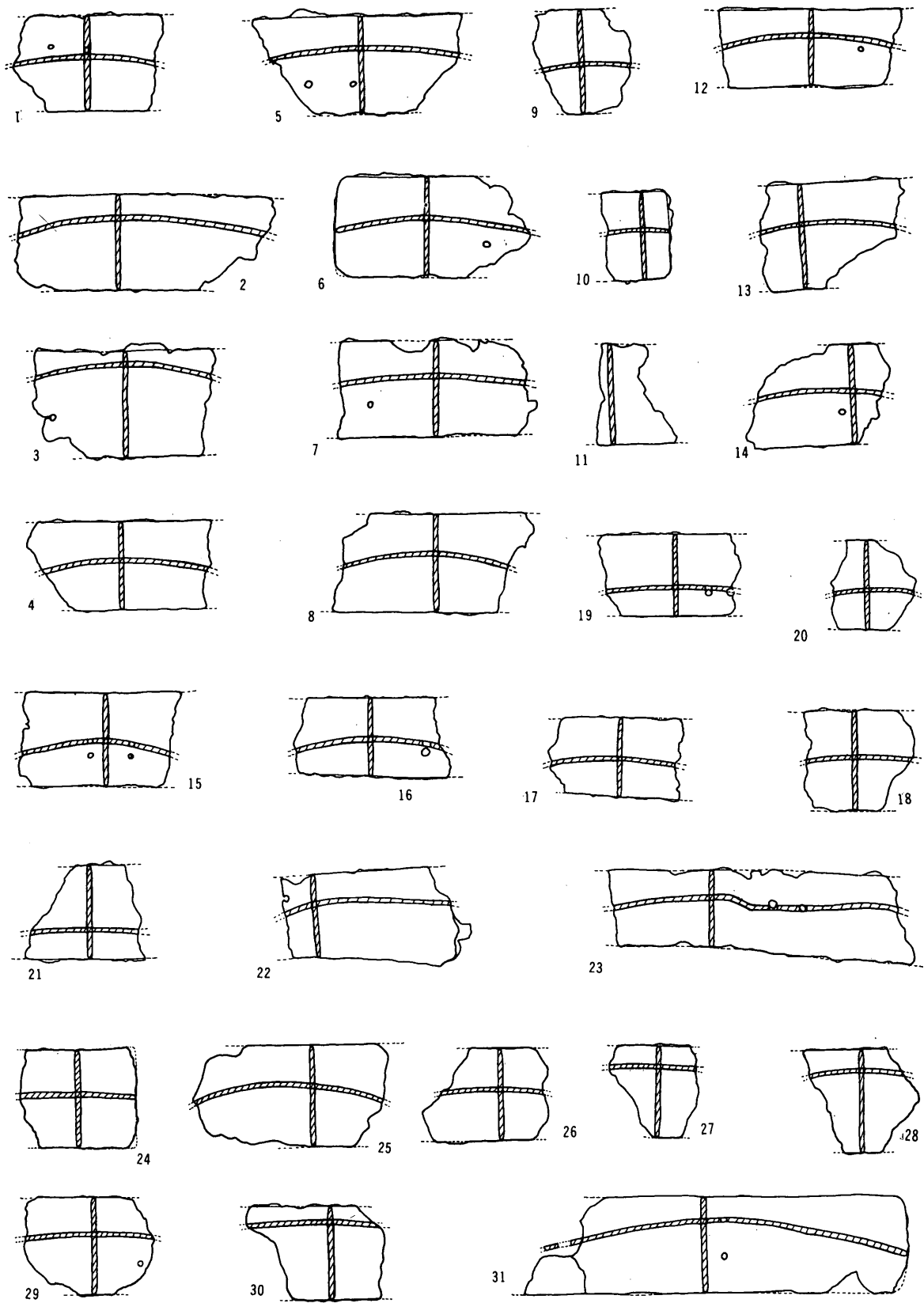
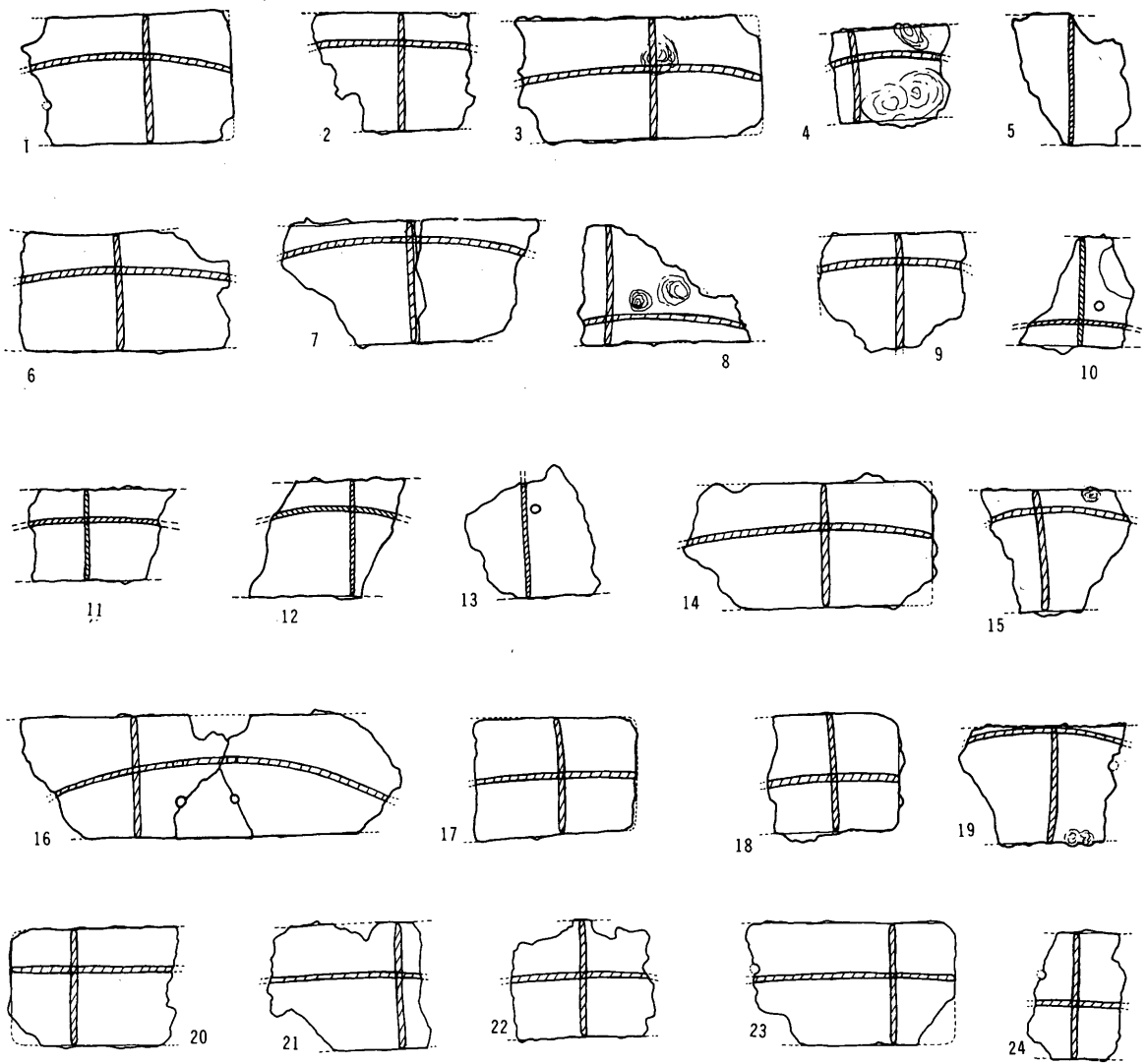


图13 妙前3号古墳出土 鉄片(I) 主体部I内部一括(1:2)



妙前3号古墳出土 鉄片(II) (1:2)

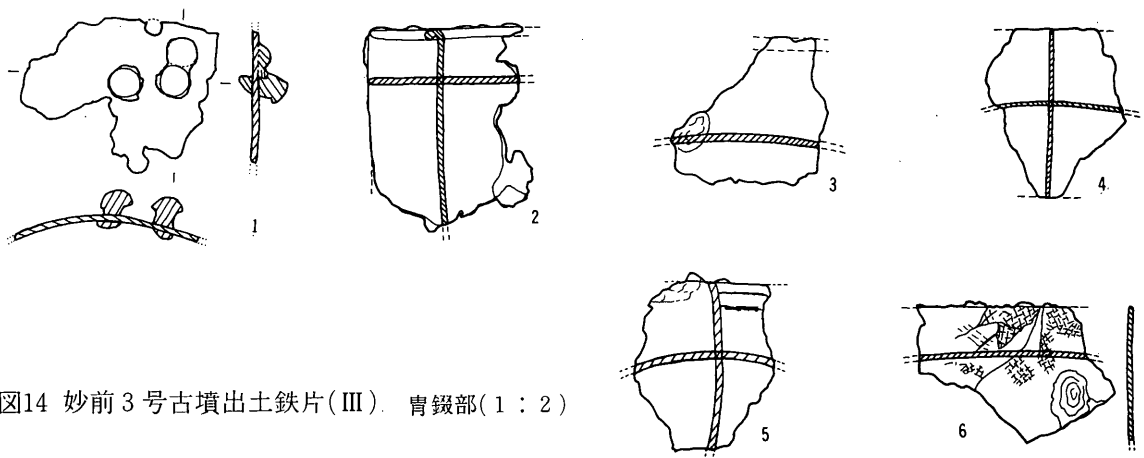


図14 妙前3号古墳出土鉄片(III) 冑鍔部(1:2)

2. 剣・大刀・矛 (図15)

剣5口、大刀4口、矛1口の出土をみる。

剣・大刀の出土状態は図5にみるように墳頂の東側に①剣1、大刀1—逆方向。②剣1大刀1—同一方向 ③剣1鉄喙1束 ④剣1大刀2—大刀逆方向、剣は三つ折れにし並べる…の一つのまとまりをもって約2㎡内に集中して出土している。④以外は人工的または崩壊によって動いた状態とみられた。剣1口が離れて冑の綴部と伴出し、矛は冑の主体部と伴出し、ともに移動されて埋られた状態が明らかであった。

剣、大刀の出土位置からみて剣No.5以外は埋葬主体IIに属するものと推定される。

(1) 剣 (図15 剣1～5)

1は身の全長56.7cm、身の最大巾4.4cm、鎬をもち、断面は扁平の菱形を呈す。きっさきはふくらみをもつ。茎先は欠損するが残存部の長さ10cm、推定長さは12.3cmとみられる。目釘孔2孔を有し、茎先部の目釘孔には竹釘?が遺存する。把元、関部には鹿角の残片が付着しており、直弧文鹿角装片(図15)の出土があり、注目される剣である。鞘、把は木製で木質の残痕をみる。重量550gを算す。

2はきっさき部を欠く。身の残存部34.2cmであるが、身の全長は40cm以内と推測される。身の最大巾3.3cm、鎬をもち、最大厚みは6mmを算し、断面は扁平の菱形を呈す。茎は関から急に巾を減じ、細くなるが欠損して長さは不明である。鞘、把は木製で木質部の付着を多く残している。

3はきっさき部を欠くが身の残存部の長さ60.3cmを算し、最大巾3.6cm、鎬をもち断面は扁平な菱形をなす。茎は5.5cmを残し欠損し長さは不明であるが剣の全長は80cm前後の長さになるものとみられる。木装の残痕を良く残している。

4は三つ折れになって大刀2口と並んで出土したもので、復原全長43.5cmを算し、身部の長さ28.5cm、茎の長さ15cmと推定される。身の最大巾3.4cm、鎬をもち、扁平の菱形の断面をなす。鞘の木質部を顕著に残し、杉を使用したとみる年輪をはっきりとみせている。

5は冑の綴部と伴出したもので身部の1部ときっさきを欠く。身の推定長さは24cm前後とみられ、最大巾2.2cm、鎬をもち、断面は扁平の菱形を呈す。茎は4.7cmを残し欠損するが、目釘孔1孔を残す。出土剣中最も細身の小形のものである。鞘、把に僅に木装の残痕を残す。眉庇付冑の綴部と伴出からみると主体部Iに属するものであり、剣の形状からみて古いものである。

(2) 大刀 (図15大刀の1～4)

1は全長103.6cm、身部の長さ84cm、平造り断面は二等辺三角形をなし、身部最大巾3.4cmを算す。関から茎先までの長さ19.6cm、目釘孔2孔を有し、関よりの孔には木質の目釘が遺存する。重量1010gと大形大刀できっさきはふくらみをもち、僅かに内反りとなる。鞘、把には杉を用い、塗漆の遺存がみられる簡略外装の大刀である。

2は全長90.8cm、身部の長さ76cm、平造りで断面は二等辺三角形を呈す。身部最大巾3.1cm、茎は1部を欠くが推定長さ14.8cm、目釘孔3孔を有し、茎先孔以外の2孔には目釘を残すが材質は不明、把、鞘には木質の遺存はよく残り、把の背部に把間を堅実にするため紐で固く巻き締めた紐痕を残す。(図15の2)把元に鹿角装痕がみられ木質の付着はない。きっさきはふくらみをもち、重量780gの大形の反りを全くもたぬ直刀である。

3は茎先部を欠くが、残存全長63.8cm、身部の長さは53cm、身部最大巾2.4cm、平造り、断面は二等辺三角形を呈す。茎の残存部9.8cm、目釘孔1孔を残す。関、把元部には木質の使用はな

く、他の材質による装具が施されたとみられる。鞘、把部の木質部の残存は良く、年輪からみて杉材とみられる。

きっさきはふくらみをもち、僅かに内反りをなし、重量385g、と軽量の細身の大刀である。

4は全長77.4cm、身の長さ62.5cm、身部の最大巾3.1cm、平造り、断面は二等辺三角形をなす。茎の長さ14.9cm、目釘孔2孔を有す。茎先は刃方にゆるいカーブをなし、把元にはせめ金具の痕跡をもつ。鞘の木質の遺存は良く、鞘巾4cmを推定できる部分もみられる。材質は杉を用いている。

きっさきはふくらみをもち、内返り、重量655g、ほぼ完形を残す大刀である。

この他、図22の鞘片、把の鹿角痕を残すもの、布目の付着部がみられている。

(3) 矛 (図15)

きっさきを欠くが長さ28.7cm、身の推定長さ17cm前後とみられる。矛身は両刃で鑄をもち、断面は菱形をなす。袋部は長さ12.7cm、袋内部の長さ9.3cm、径3~3.1cmで断面は多角形をなすとみられる。鉄製の目釘を遺存し、これに直角方向に1ヵ所袋部の合せ目をもつ。鉄目釘の遺存からみれば柄は付着していたものであるが残存しない。

矛は眉庇付冑と伴出し、移動し埋めかえられた痕跡をもつとみられるが、北西に向く位置に置かれていたことは、柄の長さを計算するとき、主体部IIに属するものと推定されるが、断面菱形をなす様式は古く、主体部Iのものが埋めかえられたとみるが妥当であろう。

3. 鉄 鏃 (図16, 17, 18, 19)

鉄鏃は小破片をいれると100点を越すが、東で出土をみた№1, №2があり、4本が一かたまりで出土をみた№3の他はばらばらな状態であった。尖根鏃、平根鏃に特殊な形態をもつものが、1点出土している。尖根鏃は北西方向の線上に—N2W1・N1E1グリッドに多く集中し、平根鏃は南東側のS1W1グリッドに玉類と伴出ししている。尖根鏃は主体部IIに平根鏃は主体Iに属するとみられる出土状態であった。

A 尖根鏃

(1) 鉄鏃№1 (図16) 長頸式尖根鏃26本が1束をなし出土するが方向は不定で攪乱された状態がみられた。鋒は片刃の平造り、断面は二等辺三角形を呈し、逆刺をもつ、刃巾0.8cm 長さ2.7~3cm、身の全長は10.5~11.5cm、茎は5.6cmを算し、全長17cm前後となり、矢柄部を遺存する。

(2) 鉄鏃№2 (図17)

長頸式尖根鏃26本が1束をなし、N42°Eの方向に揃って出土をみた。鋒は片刃、平造り、逆刺を持ち、断面は二等辺三角形をなす。刃巾0.8cm、長さ3.3cm、身は№1, 2ともに棒状形をなし、断面は長方形をなす。身の全長11.2cmとほぼ統一された形をなす。図17の1は完形で茎の長さ4.9cm、全長16cmを算す。矢柄は竹で茎に繊維を巻き上に接着用の漆の塗布したのがみられる。

(3) 鉄鏃№3 (図18の1~4, 5, 8~14, 16)

長頸式尖根鏃4本(1~4)が一括出土しているが、ばらばらに出土した中に同系列とみる、5, 8~14, 16がある。鋒は両刃、片丸造り、逆刺を両側にもつ。刃巾1cm、長さ2.7cm、身の全長13.7cm、身は棒状形をなし、断面は長方形をなす。ほぼ完形の図18の3でみる茎の長さ5cm、全長18.8cmを算し、14は20cm近い長さをもつ。

(4) 図18の7は鋒は三角形をなし、刃巾1.2cm、長さ1.5cm、鑄をもち断面は扁平の菱形を呈す。身の全長7.8cmの棒状形を呈すが、他に比して短かく、特殊な様式をもつものである。

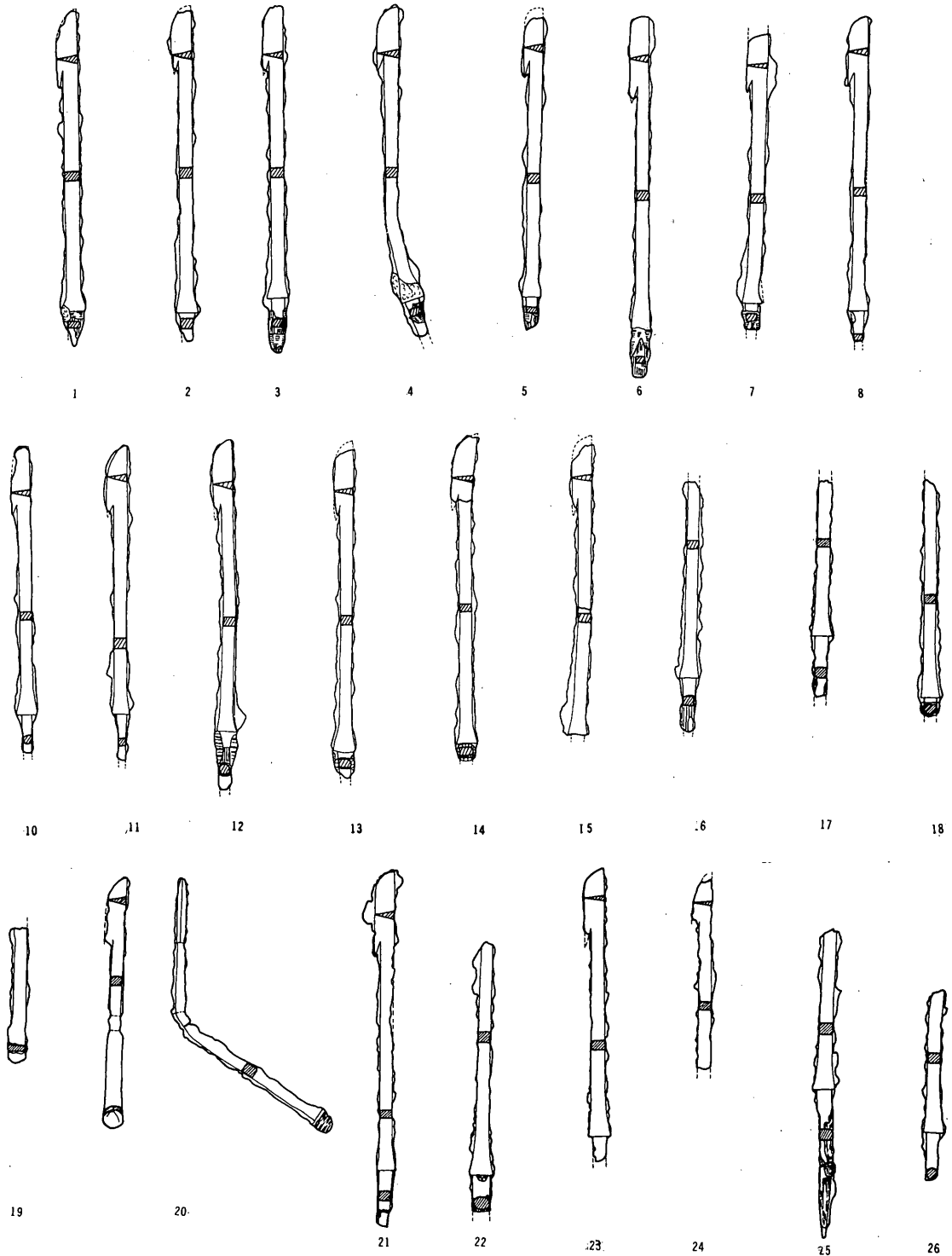


図16 妙前3号古墳出土鉄鏃(1) №1束(2:5)

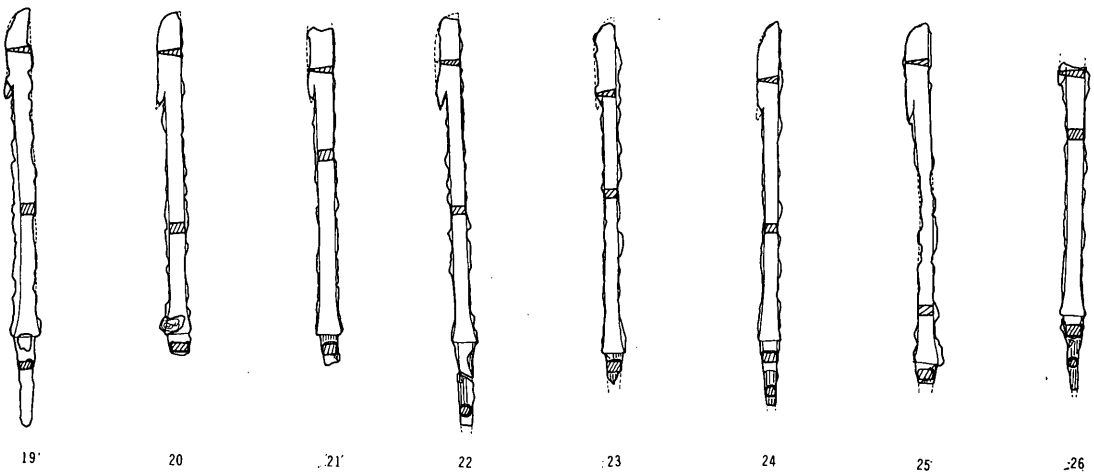
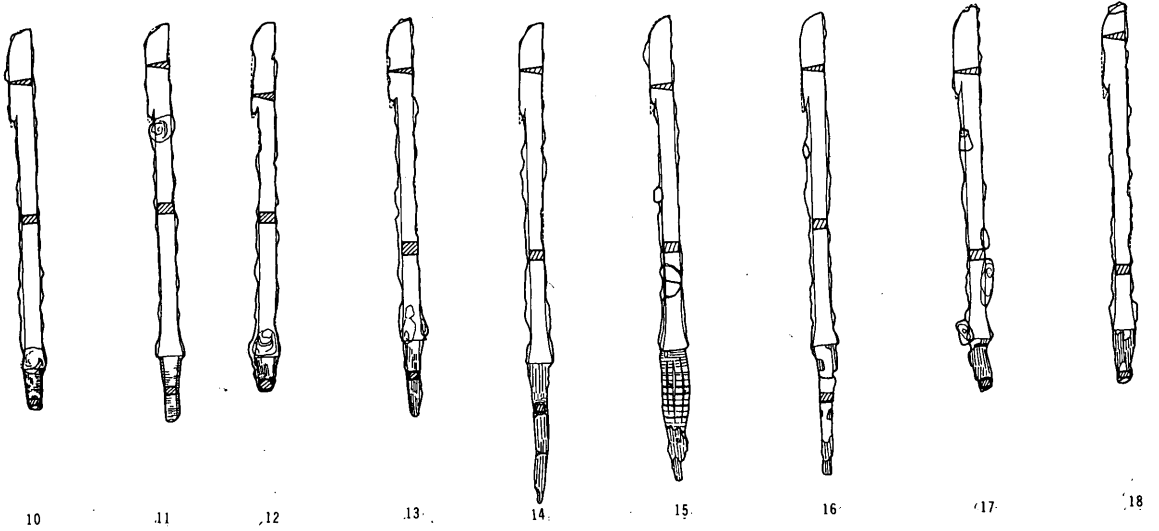
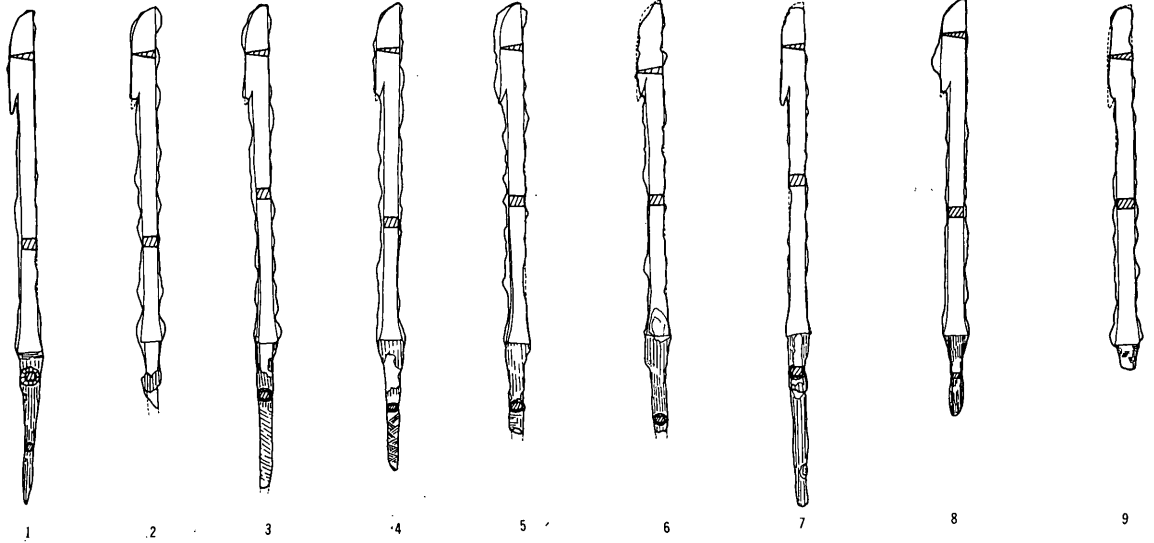
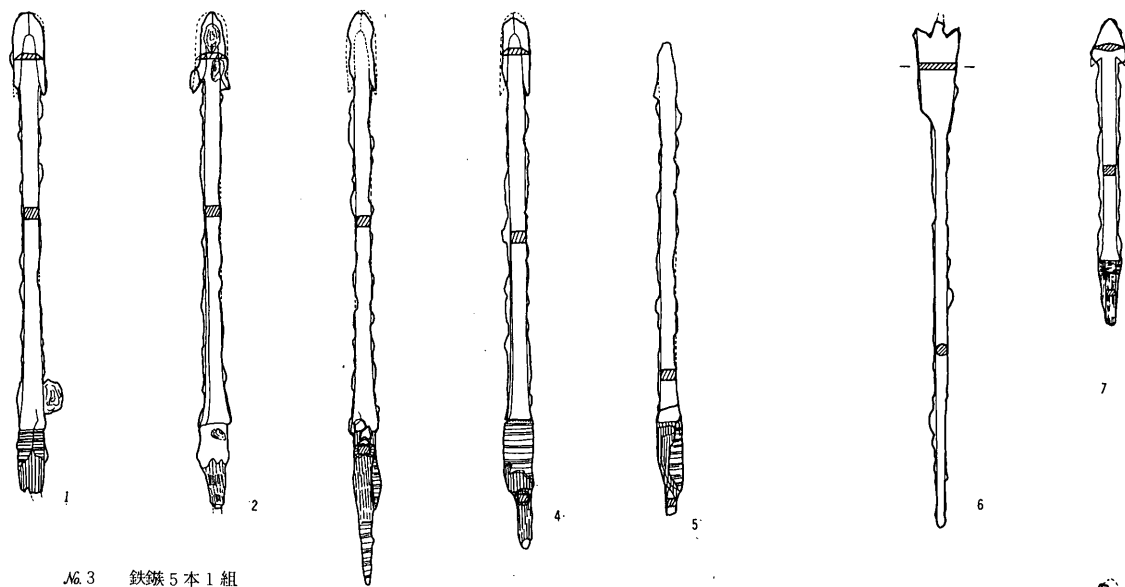


图17 妙前3号古墳出土鉄鍔(2)N 2束(2:5)



№. 3 鉄鏃 5本 1組

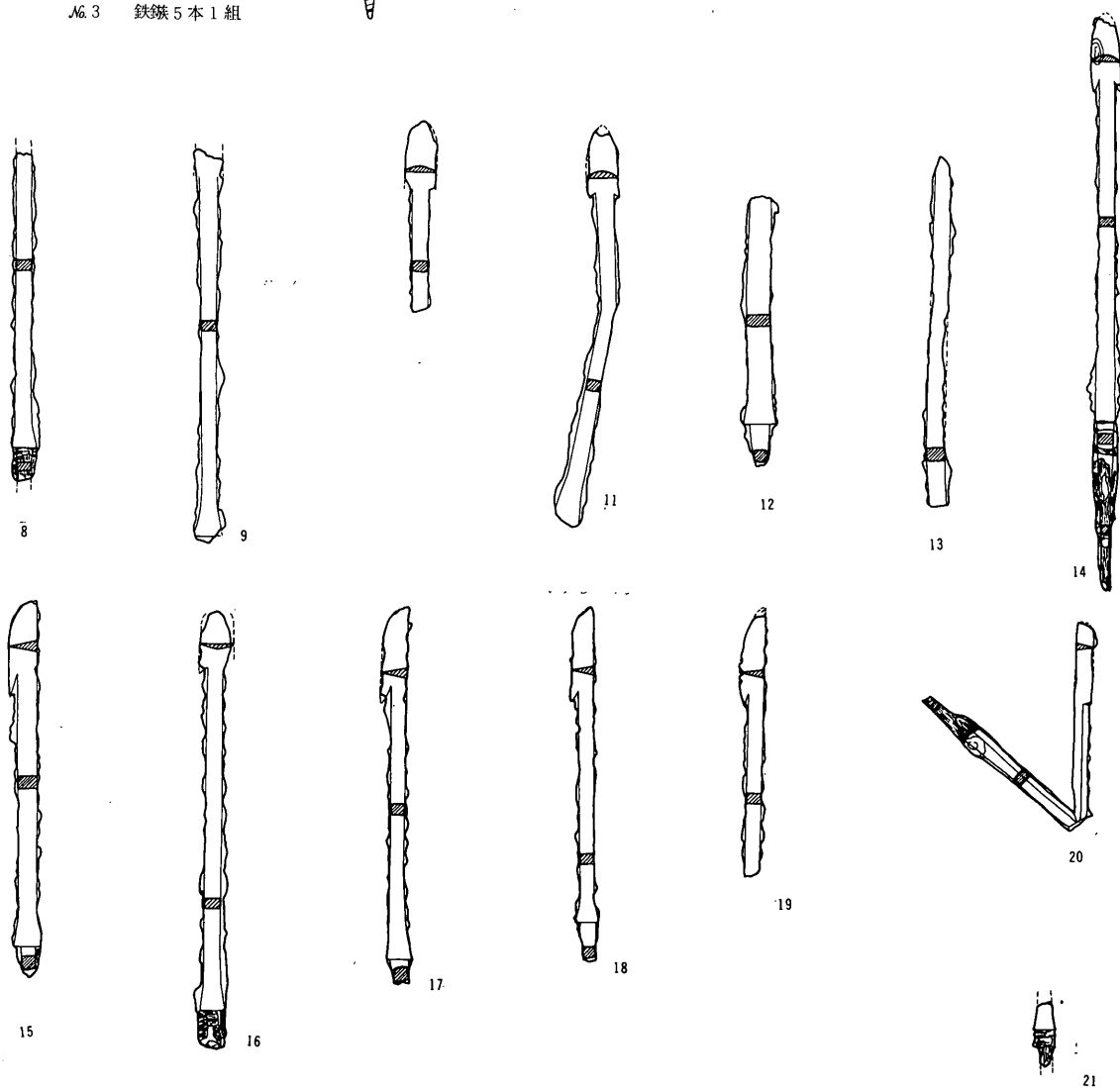


図18 妙前3号古墳出土鉄鏃(3(2:5))

B 平根鏃 (図19)

柳葉形で小形のもの和大形がある。

小形には鏃をもち断面が扁平な菱形をなす9, 10, 13があり、逆刺をもつ。9は刃巾1.2cm、長さ3.8cmの無茎、すんなりした形をなす。13は有茎身の全長13.3cmを算す。身は棒状形をなし、断面は長方形をなす。

片丸造りに4, 5, 7, 12があり鋒巾1.3cm、長さ3.5~3.9cm、逆刺をもつ。12は有茎とみられる。8は鏃付着が多く、断面を知ることはできない。逆刺のないものとみる。

大形には1~3, 6があり、無茎、逆刺をもち、2は特に大きな逆刺をもつ。断面はともに凸レンズ状をなし、扁平である。鋒の長さ、1は5.8cm、2は6cm、最大巾は2.5cmと特に大きく、1, 3, 6の巾は1.8cm前後である。

11は鋒部が欠損し不明であるが片刃の平造りとみられ、巾1.5cm前後となる茎をもつものともみられる。

C 特異な形体をなすもの (図18の6)

鋒の先端が三叉になり、あたかも三目鏃とみられる形状をなす。鋒巾1.2cm、身と茎の区別なく棒状形にひと続きとなっている。断面は四角から円形になる。全長17cmを算す。

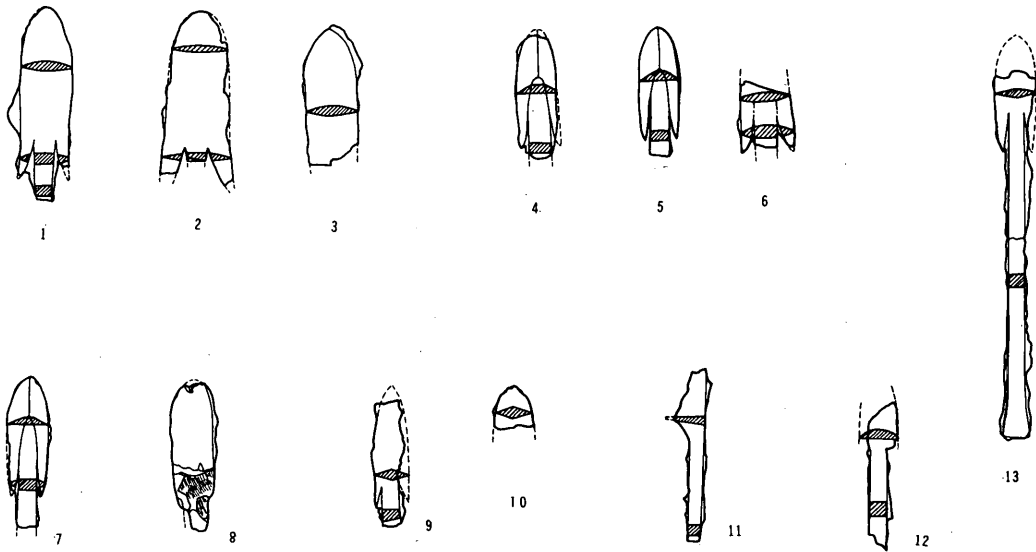


図19 妙前3号古墳出土鉄鏃(4)(2:5)

3. 工具 (図20)

- (1) 鉋 (やりかんな) 全面に錆があるが保存状態は非常によく完形で出土した。刃は両刃で上ぞりになり、裏面に細い浅い溝が認められる。刃の長さ4cm、巾1.2cm、錆をもち断面は三角形をなす。全長24.5cm、身部の断面は扁平の長方形をなし、先端部はやや両辺がふくらんで宝珠状形をなす。重量58gである。
- (2) 鑿 (のみ) 全面に錆があるが保存状態はよく完形である。全長23.5cm、重量195g、身の長さ18.8cm、刃は両刃で、巾2cmの平鑿である。刃元部の断面は長方形をなし、身は稜をもつがやや丸みをもつ方形となる。茎は4.5cmと短かく断面は正方形をなす。
- (3) 鉄斧 保存度はよく、長さ7.2cm、肩がやや張りだしている。刃巾4cm、両刃で柄を挿入する袋部は鉄板をつぎ合せて作られている。径2.3cmの円形の断面をもち、内部には柄の木質部が多量に付着している。身と直角をなす柄をつけ木材の面をけずるに用いられた手斧であり、重量は70gと軽量のものである。
- (4) 刀子 いずれも破片で1は基部を残す、身の大部分を欠損する。残存部の長さ8cm、身は平造り、身巾1.5cm、断面は二等辺三角形を呈し、茎の断面は長方形をなす。2は刀子の茎の部分とみることが刀子かについては不明のものである。
- (5) 砥石 巾2.8cm、厚さ1.6cmやわらかい灰白色の泥岩製で両端を欠く。四面に使用痕を残す。出土地点はS7E1グリッドの葺石直上であるが墳頂よりの崩壊したものとみられる。前記の工具に属するものと考えたい。

4. 玉類 (図21)

玉類の出土はS1W1グリッドより出土し、主体部Iより崩れた位置にある。ガラス丸玉6個と管玉4個がある。ガラス丸玉は長さ5~6mm、長径6~8mm、ブルー一色である。管玉は緑色珪岩製で長さ2~2.1cm、径5.5~6mmの細い揃った形状をなすもので、ともに5世紀中葉を下るものではない⁽⁴⁾

ガラス丸玉計測 (単位mm) 表1

No.	長さ	長径	孔 計	色 調
1	6	6	1.5	濃い紺
2	6	7	1.8 横に小孔が通る	〃
3	5	8	2.0	青
4	6	7	1.0	紺
5	6	7	2.0	青
6	5	6	1.5	紺

管玉計測 (単位mm) 表2

No.	長さ	径	孔長径	色 調
1	2.1	6.0	1.5	淡緑色
2	2.1	5.5	2.0	〃
3	折れ	6.0	2.0	〃
4	2.0	6.0	2.0	〃

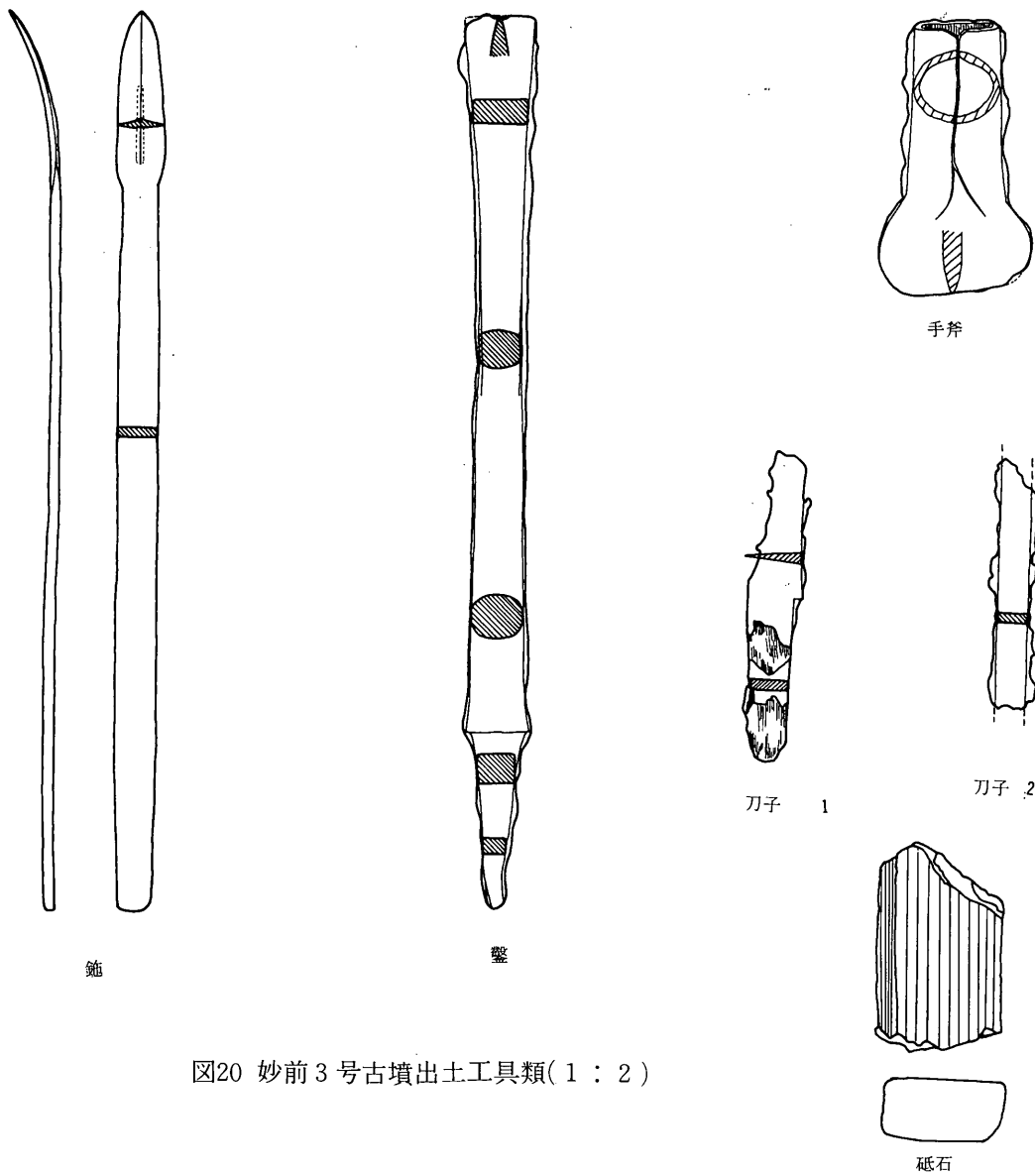


图20 妙前3号古墳出土工具類(1:2)

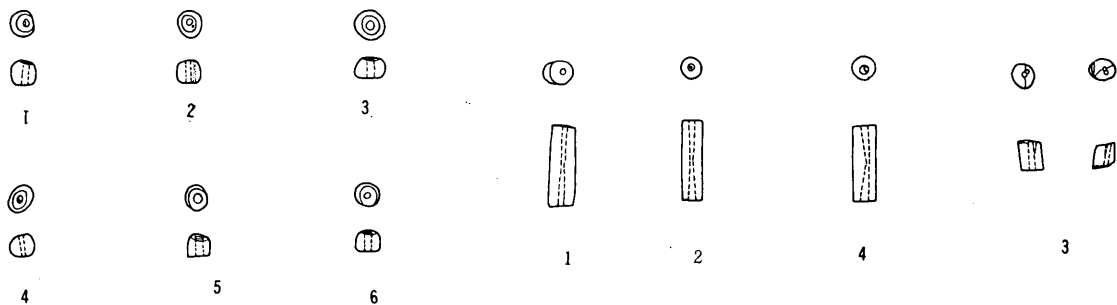


图21 妙前3号古墳出土玉類(1:2)

5. 不明鉄器 (図22)

図21の1～5の鉄器片がある。1は帯金具とも考えられるが鋸の大きさ、形状からみて帯金具とは考えられない。2, 3は柄に付着させたとみる釘が遺存するが何の用途のものか不明である。4, 5も用途不明の鉄器片である。⁽⁵⁾

注1 末永雅雄「日本上代の甲冑」 創元社 昭. 19

2 黒漆の塗装については彫刻家倉沢興世の教示による。

3 大塚初重の教示による。

4 大場磐雄の教示による。

5 大塚初重の教示による。

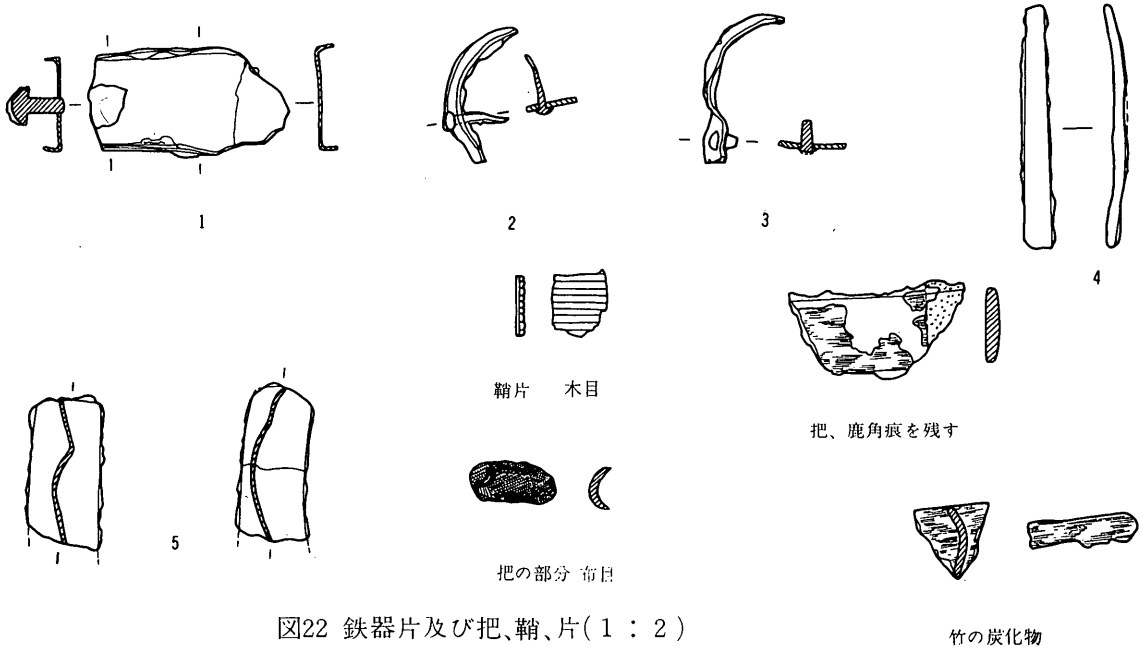


図22 鉄器片及び把、鞘、片(1:2)

VI 埴 輪

本古墳より出土した埴輪片は2000点にも及ぶが、残念にも完形を知りうる資料は絶無であった。形象埴輪3片を除き他はすべて埴輪円筒であった。ただし埴輪円筒の中にも表面に丹を塗り胎土も比較的精選されたものなど、あるいは形象埴輪に近い役目をもったものではなかろうかと思われるものもあった。

口縁部より記すが、実物では口縁全体が接続した形で発見されたものがなかったので、全部図上復原である。(図23)

図23の1は口径21.5cmで、口縁より下15cmの所に比較的幅がせまく高さが高い(1cm)たが(箍)がとりまいていて、そのすぐ下に径4cmの円形の貫通孔がある。茶褐色を呈し焼成は良好である。

2は口径17cmあり、口縁より下ること14cmに幅の広いたががある。器の厚さは1cmで口縁に近づくとつれてややうすくなりながら外反する。口縁は平らで中央に浅い沈線が入っている。円筒の表面にへら調整、あるいはたたき目のあとが残っている。

3は口径18.5cmで厚さ1.4cmあり、厚手となっている。表面刷毛目も残っているが、平滑となっている。裏面にも刷毛目調整のあともある。

4は口径20.5cmでほぼ垂直に口縁より下っていて、上より16cmの所にたががある。たがは1.6cmの幅をもち高さ0.8cmで頂が平坦となっており円筒の表面が刷毛で調整されていてその上に丹が塗られており飾られた円筒埴輪と称すべきであろう。

5は口径21cmで表面は淡黄色を呈し、器面は滑かである。

6は比較的大きい破片で、口径24.5cmあり、平坦面をもつ口縁より下14cmの所にたががとりまいていて、たがの頂が少し平坦になっている。

その下に径3.8cmの円形の貫通孔がある。たがの付近がやや胴がしまっている感じをもつ。

7はほぼ直立した円筒で口径20.5cmあり、口縁より下ること15cmに幅が広く高さが0.6cmの高くないたがが存在する。表面淡褐色を示しているが、裏面は灰褐色である。

8は淡黄色で口径17.5cmあり、刷毛目の調整痕が残っており、比較的厚手である。

9は朝顔形の埴輪円筒で、口径は広がっているので26.5cmを算える。上より9.5cmの所に稜があり、それより上は急に器形が開き、口縁に至り、下はすぼんで細くなっている。刷毛で調整した後に丹を塗ってある。これらの朝顔形の埴輪円筒の破片は出土量が少なく全体の7%位である。

10も朝顔形のその一部で、口径は32cmを測り、口径は最大値を示す。表面裏面とも黄灰色で、裏面に横なでの調整痕がある。器の厚さも1.6cmとなっている。

11は朝顔形埴輪円筒のくびれ部で下に続く膨らみの始まる部分である。

口縁の形は図24の1の如く直立して口縁に至るにしたがってうすくなるものが最も多く、2の如く口縁が平坦でありそこに一条の沈線の印されているもので、図23の2の如きものもその1例である。3の如く口縁に至りやや厚くなり平坦になっているものも少しはある。4の如く比較的薄手で口縁に至るにつれて薄くなっているものは朝顔形の円筒に多く、5も朝顔形の口縁であるが、先を斜めに切った如き形をしていて数量はごく僅かである。

たが(箍)にもいろいろある。図25の1は幅に比して高さが高いもの、2も同様であるがたがの頂上に平坦面を有するもので、ともにやや器壁は薄く胎土もいいものに多い。3は台形のたがを施したもので数は多く、4は低く幅の広いものである。これらの形の異っているものは年代の差によるのか、製作地の差によるものかであろうが、何のきめ手も発見し得なかった。

底部も多く発見されたが、これも口縁と同じように底部全部がつなぎ合わすことのできるものはなかったので、図26もすべて図上復原したものである。

図26の1は底径14cmで底を厚くするために最初に作った円筒に更に粘土を押し加えつけたもので、そこに製作者の指のあとが残されている。墳丘の頂上平坦面より出土。

2は径15cm、黄褐色で焼成は良い。

3は径22.1cmあり、表裏ともに指のあとがついている。黄褐色を呈し焼成がいい。

4は頂上平坦面より出土したもので径24cmある。

5も頂上平坦面近く出土したもので、径18.5cmあり、指痕が残っている。

6は墳丘頂上より出土したもので、径20cm、表面にへらによる調整痕が残り、裏では輪積みのあとを

見ることができる。胎土も精選されており焼成良好。

7も頂上平坦面の端より出土、径17.5cmで表にはへらによる縦の調整痕があり、裏には指の痕が残されている。

8は径22.5cmで焼成は良好で、裏に粘土をはりつけてその上を指で押し、底を厚くしたことが分る。

9も頂上近くにあったもので径21cm、表面には刷毛目の調整痕もあるが、その間にごく僅かであるが布目の跡が見られることに特色がある。

10は径24cmで大きいもので上の方へ行くにしたがい径の増大を知ることができる。

11は径19.5cmで表にへら調整のあと、裏には製作時に残された線が見られる。

12は墳丘の東裾に近い所より発見されたもので、黄褐色を呈し焼成はいい。裏に製作時の線が印されている。径僅かに11.5cmで非常に小さいもので、円筒埴輪の下底というより、形象埴輪の下底と見たいものである。

13は頂上部より発見されたもので、径19cmあり、底部がふくらんで上の方へいくにつれて径がせばまってくる点に特色があるものである。

14をみると、底部の製作過程がわかる。即ち円筒の3分の1にあたる弧状の粘土板を作り、それを3個合せてまず円筒の下部を作る。その上に輪積の粘土を加えていったものと考えられる。底部にその弧形が見えている。

底径は最小11.5cmより最大24cmに及んでいる。最下底を厚くするために更に土を加えて指で押しつけたものもあり、したがってその壁の厚さも2.1cmより4.4cmと差が生じている。

胎土は精選され雲母片の見られるものもあるが、石英類の小石の混っているものもあり、一般的に前者が焼成が良い。胎土を輪積みにし、その上を指で押え、へらや刷毛（草の繊維）時には薄い木片で調整している。その調整痕は表面にも見えるが、櫛で縦の線がはっきり判るように痕をつけたものは非常に少ない。そのかわり丹を塗って飾られたと思われるものがある。これが本古墳の埴輪円筒の特色かと思われる。

底部にはすすきよしかと思われる禾木科の植物の葉や茎のあとが、はっきりと印されている。それらを敷きつめた上に製作した粘土の円筒を置いたものらしいが、編んだむしろなどの跡は見出されなかった。

形象埴輪（図27） 3個出土した。

1は器壁の厚さ1.5cmあるが、胎土はあまり良くない。中央に弧線があり、その中に7本の沈線が印されている。あまりに小破片なので何を形どったかは明らかでない。

2は厚さ1.4cmあるが、胎土もあまりよくなく色調も黒ずんだ褐色で他の円筒と異っていることは一見してわかる。上に円いと思われる貫通孔があり、それをとりまいて2本の円形の沈線が走っている。その弧線の下方には横に走る調整痕が見られる。形象埴輪の破片ではあるが、何を表わすものであろうか。

3はたがの下にある貫通孔をとりまいて弧線が印されている。一見円筒埴輪とも見られるが、貫通孔の面を指で押しして手紋が残されていることと弧線よりみて形象埴輪の1部とした。

この外地主小島氏がかつて西北部の墳丘を崩した時に出土した埴輪片の中に、直径が小さく、胎土が極めて良く、焼成もよく、表面に丹塗りをした円筒片が2個あった。形象埴輪の下部の円筒と思って見ておいたが、途中でどこかへ紛失してしまったことを残念に思っている。

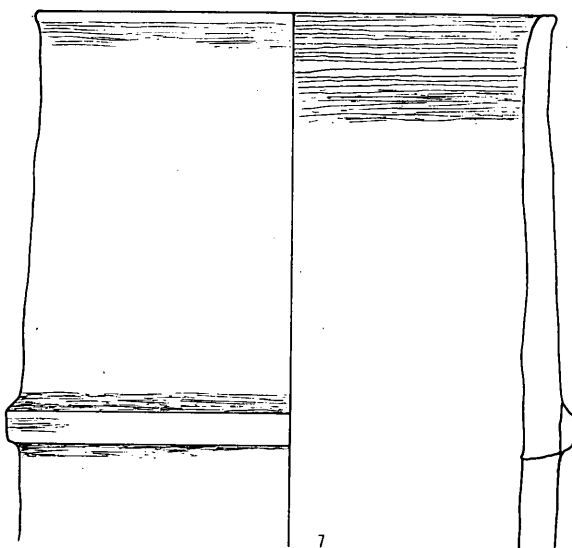
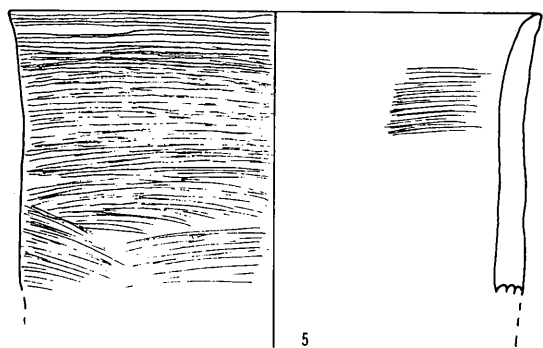
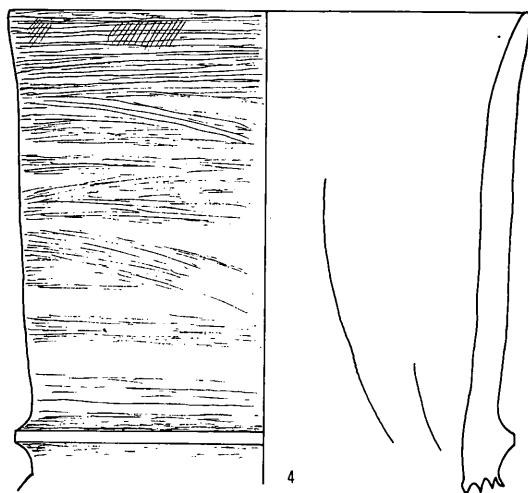
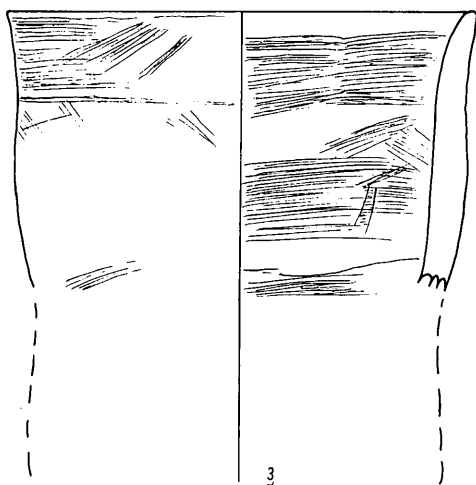
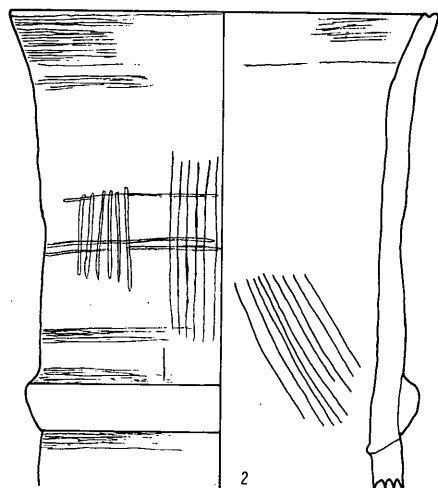
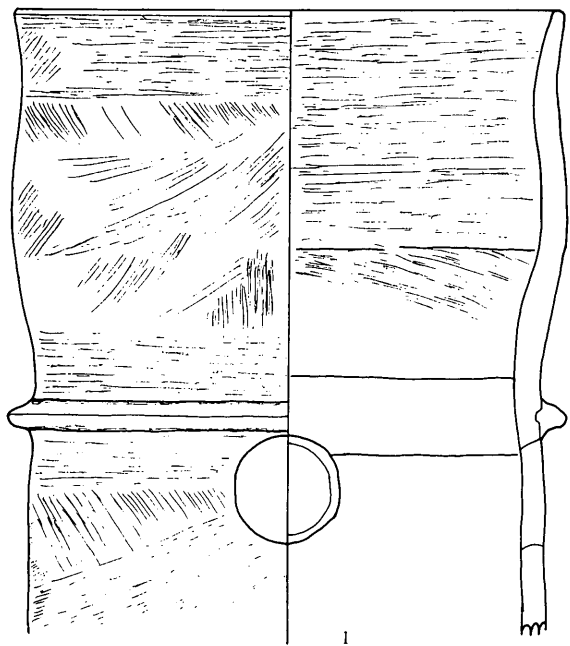


图23(I) 妙前3号古墳出土埴輪(I)

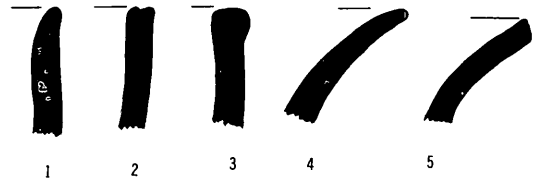
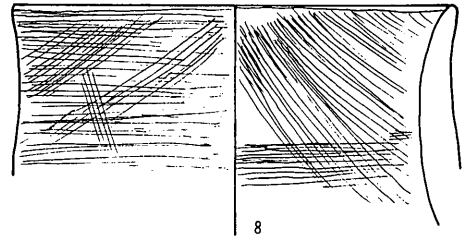
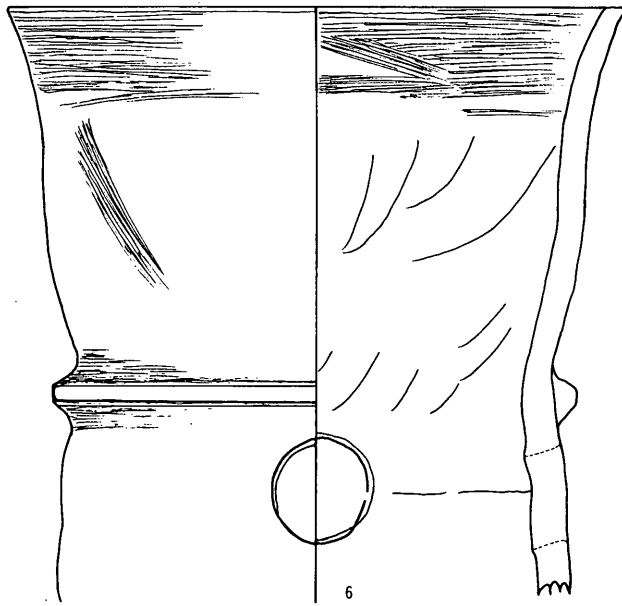


図24 埴輪口縁部 (1:3)

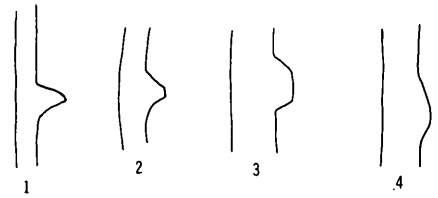
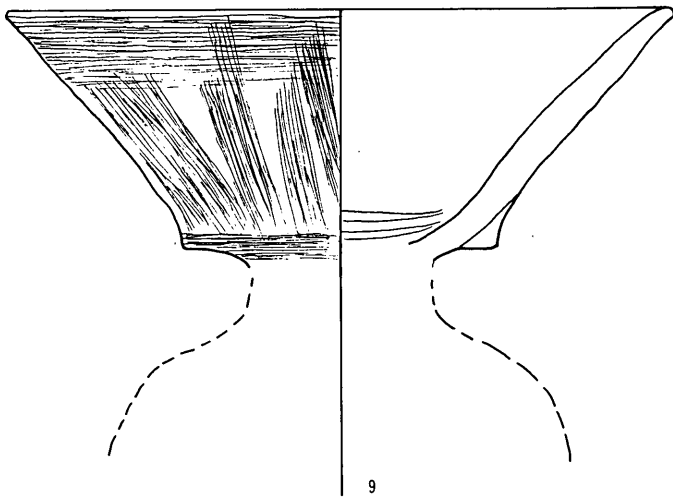


図25 埴輪胴部たが部 (1:3)

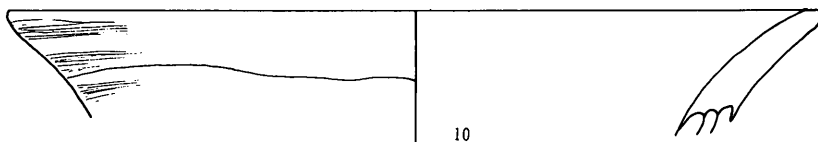
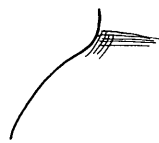


図23(II) 妙前3号古墳出土埴輪

(1:3)



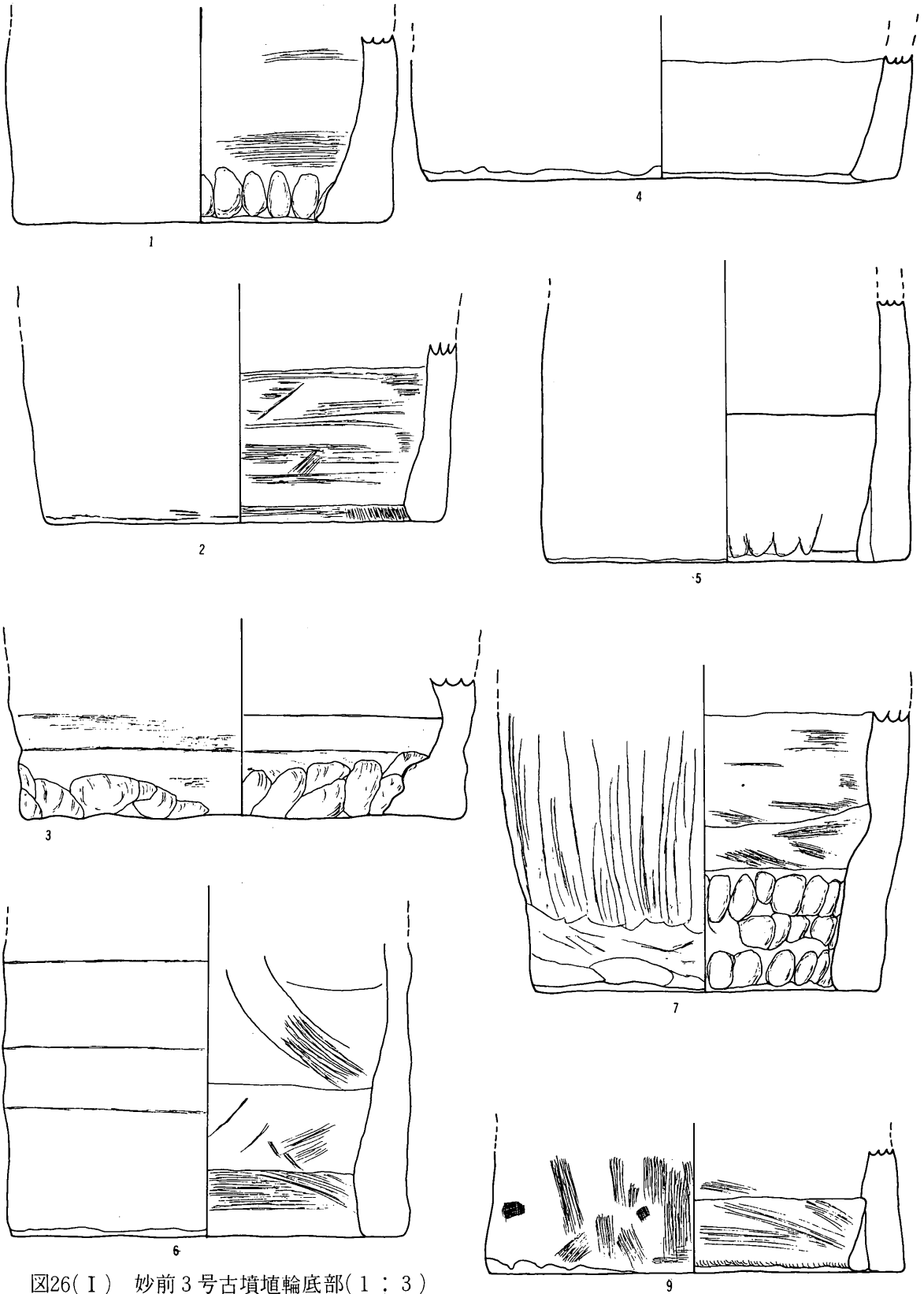
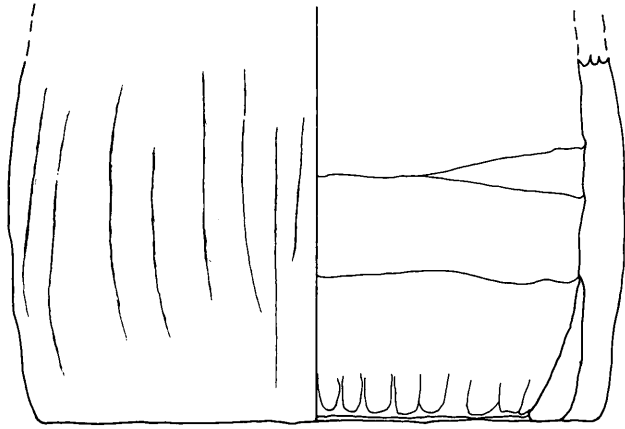
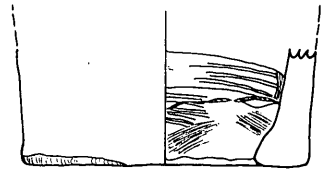


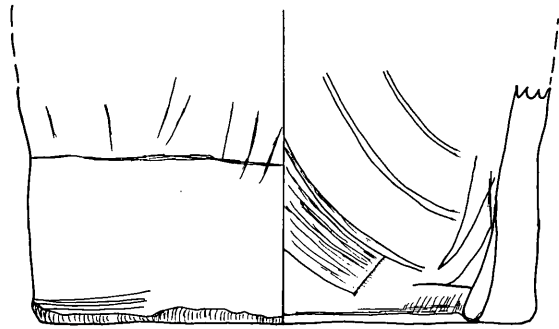
图26(I) 妙前3号古墳埴輪底部(1 : 3)



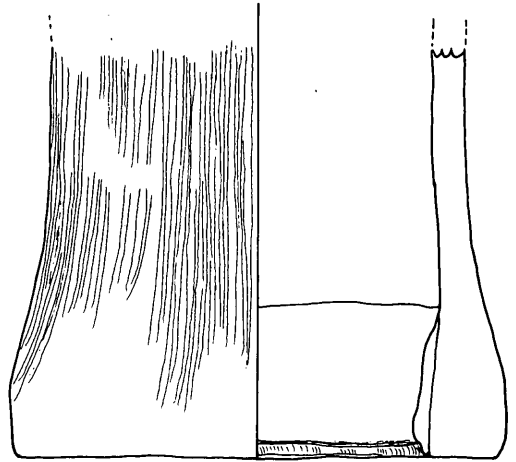
8



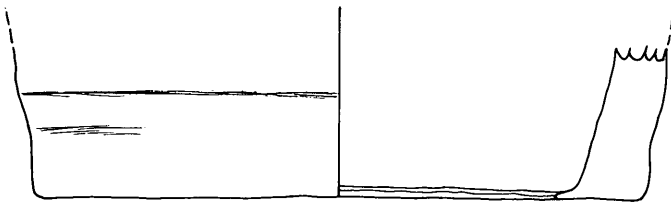
12



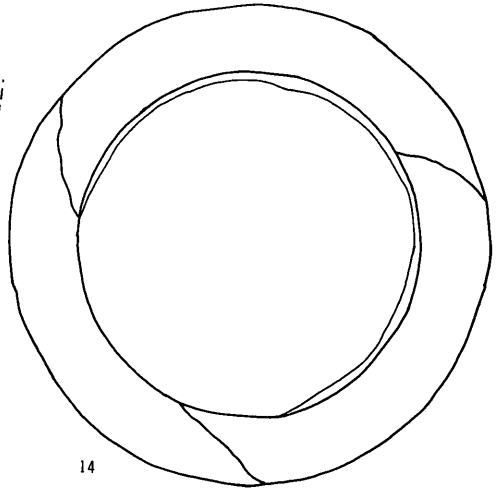
11



13



10



14

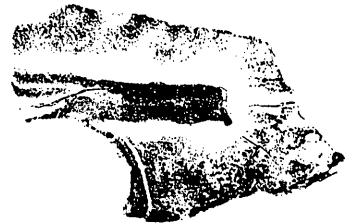
图26(II) 埴輪底部(1 : 3)



1



2



3



图27 形象埴輪(1 : 3)

Ⅶ 妙前3号古墳の築造年代

主体部Ⅰについては、その内部構造は礫と粘土による槨を墳頂にもつものであり、出土遺物をみると工具、玉類これに武具がつく。工具では鉋、鑿、手斧がみられ、古い要素をもつ。玉類ではガラス丸玉管玉がある。ガラス丸玉はブルー一色であり、管玉は緑色硅岩製の細い形の揃ったもので、5世紀中葉を下るものではない。

武具では眉庇付冑は5世紀のものであり、関東における出土例では5世紀中葉から6世紀初頭であり横穴式石室をもつ古墳よりの出土例はない。下伊那の地域性からみて関東よりその導入が早かったものと考えられる。眉庇付冑に伴出した矛の断面は菱形をなし、鏃をもつ古い様子のものであり、鋌部に伴出した剣（剣№5）は小形の古いものである。玉類と伴出した平根鏃も古い要素をもつものである。

主体部Ⅰの内部構造、出土遺物から築造年代を想定すれば5世紀中葉⁽¹⁾と考えるのが妥当といえよう。

主体部Ⅱは主体部Ⅰの上に直角に交差して追葬が行なわれたとみるもので、遺物は剣、大刀、尖根鏃の武具を主体とし、馬具類の出土はみられない。剣には直弧文鹿角装をもつものがあり、5世紀後半を下るものでない。大刀にも鹿角装の遺存が認められるものがある。剣4口、大刀4口の同率の出土をみる。剣には巾広の短かい古い要素をもつものがある。しかし、尖根鏃は身の長く棒状形をなすもので、その出現は5世紀後半⁽²⁾のものともみられる。

尖根鏃と5世紀後半を下がらない剣の組合せは主体部Ⅱの埋葬時期を5世紀末、下っても6世紀初頭までと考えたい。

妙前3号古墳は妙前古墳群で最大の規模をもつものであるが、古墳群の立地が沖積段丘の平坦面にあり、円墳でその築造年代は新しいものとみられていたものであるが、本次調査により下伊那地方では最も古い古墳の一つであることが判明した。

飯田市松尾の沖積段丘面は下伊那地方では最も広い平坦面をもち、弥生中期初頭の寺所式の標準遺跡寺所は妙前より南400mにあり。妙前、寺所、明、清水と南北2000m以上続く沖積段丘面には弥生中期後期、古墳期から歴史時代にいたる遺跡⁽³⁾が分布し、伊那谷における弥生中期初頭から最も早く開けたとみることのできる地形的に恵まれた地域である。

妙前3号古墳は、松尾沖積段丘面の最も北に、松川氾濫の自然堤防をなす面に立地し、伊那谷における古い古墳築造の背景が整った位置にあるとみられる。妙前古墳群の3号墳以外の古墳については未調査であり、その規模は小さくなるが、それらの築造年代、3号古墳との関連性については今後究明⁽⁴⁾すべき課題であり、さらに松尾古墳群の中における系統的な発展を考える必要がある。

注1 大塚初重の教示による。

2 大塚初重「弓と矢」 世界考古学大系 日本Ⅲ P78～79 平凡社 昭34

3. 全国遺跡地図（長野県） 昭42. 3

4. 下伊那史第二巻

VIII ま と め

妙前3号古墳についてまとめてみると次の如くなる。

1. 長野県伊那盆地のうちでも有数な古墳群である妙前古墳群の盟主たる円墳であり、円墳としては伊那盆地中では5位に位する大きさをもつこと。⁽¹⁾
2. 伊那盆地の古墳が多く横穴式石室を持つのに本古墳は竪穴式の礫と粘土による柳をもつと考えられること。
4. 葺石が墳丘の上から3分の1より裾部に至る間に施され、それが残存していること。
5. 埴輪円筒の底部が頂上の平坦面に立つたまま多く残っていたことより、そこに立てられたと考えられる。裾部に破片の多いことから中段にもたてられたとも考えられたが、封土の断面からはその痕跡はみられなかったこと。形象埴輪も存在したこと。
6. 周囲に埴をめぐらしていたこと。
7. 出土した遺物に主体部Ⅰよりとみる眉庇付冑、工具、玉類、平根喉、小形剣があり、これらから考えて本古墳の築造年代を5世紀中葉と考えられたこと、主体部Ⅱの遺物には直弧文鹿角装をもつ剣、大刀、多くの尖根鏃の出土をみ、馬具類の出土がみられなかったことより5世紀後半から6世紀初頭を下るものでないと考えられたこと。
8. 土器類には内黒の土師器片、新しい須恵器片が数点出土をみたが、中世陶片、近世陶片と伴出しており、後に物すて場と利用された際に捨てられたと考えられる。

なお、封土中より、寺所式、北原式、恒川式、中島式の弥生式土器片や石器が含まれているが、これは封土を作るとき、この付近にあった遺構をつぶして運んできたときまじったものである。

長野県伊那盆地には調査がよく行なわれたことと関連してか古墳の数は多く上伊那地区に172基、⁽²⁾下伊那地区に682基と⁽³⁾されている。しかしこのうち学術的に発掘されたものは僅かに数基に過ぎない。そのうちの1基として本古墳がある。しかも発掘調査は行なうが、墳丘はできるだけ保存するという目標をもっていたことは注意されてよいと思う。しかも発掘の結果は伊那盆地としては最も古い古墳の1であることがわかった。従来最古の古墳は飯田市竜丘兼清塚であるとされていたが、本古墳は或はそれより年代が溯ることも考えられる。

下伊那地方には前方後円墳23基があり、それらは多く横穴式石室をもち、埴輪があるが、竪穴式石室を持ったと考えられるもののうち最も古いものがあるとされていた。

しかし下伊那史2、3巻をみると無石室と記されている円墳もかなり多い。その中には本古墳の如く竪穴式石室や土壇をもったものもあったにちがいない。本古墳を頭に入れながら、そうした古墳を再検討してみることは今後課せられた問題ではなからうか。

注1 下伊那史第二巻

注2 上伊那誌

注3 下伊那史第二巻

調 査 組 織

1. 妙前古墳緊急発掘調査委員会

橋 本 玄 進	飯田市教育委員長
矢 亀 勝 俊	飯田市教育長
河 野 通 幸	飯田市教育委員
山 下 順 藏	飯田市教育委員
森 本 信 也	〃
矢 高 東	飯田市文化財審議委員長
大 沢 和 夫	飯田市文化財審議副委員長
倉 沢 興 世	飯田市文化財審議委員
村 松 光 喜	〃
牧 内 武 司	〃
滝 沢 秋 三	飯田市教育委員会事務局社会教育課長

2. 調 査 団

団 長	大 沢 和 夫	飯田女子短大教授	日本考古学協会会員
調査主任	佐 藤 魁 信	日本考古学協会会員	
調査員	宮 沢 恒 之	〃	
〃	今 村 正 治	下伊那教育会考古学委員長	
調査補助員	金 子 真 土	明治大学学生	
〃	松 田 真 一	〃	
〃	藤 野 龍 宏	〃	
協力員	塩 沢 仁 治	長野県考古学会員	
〃	松 沢 英 雄	下伊那考古学会会員	
〃	若 林 博	〃	
〃	松 村 全 二	〃	

3. 指 導 者

今 村 善 興	長野県教育委員会文化課指導主事
神 村 透	〃
桐 原 健	〃

4. 特別指導者

大 場 盤 雄	国学院大学客員教授
大 塚 初 重	明治大学教授
小 林 三 郎	明治大学講師

5. 事 務 局

飯田市教育委員会社会教育課

滝 沢 秋 三	社会教育課長
渡 辺 亮 藏	課長補佐係長
長谷部 三 弘	主 事
河 合 武 文	〃
北 原 清 子	〃
塩 沢 正 司	〃

お わ り に

飯田市松尾6236番地所在の妙前古墳、第三号墳（大塚）緊急発掘調査実施に至る経過は、昭和43年8月24日当該土地所有者代理人より発掘届の提出があったことから端を発し、以来土地所有者と保存、保護について再三にわたり要請協議をしてきたが、この間土地所有者も変更し、保存について難色があった。この為長野県教育委員会、文化庁に対し保存措置について協議を行ない、県埋文担当者の現地視察等の結果、同古墳の重要性に鑑み、今回国補助金500,000円、長野県補助金150,000円、飯田市負担金350,000円、合計1,000,000円の事業費をもって、飯田市教育委員会の直轄事業として、この緊急発掘調査記録保存事業を実施し、大きな成果を残してここに完了した。

時あたかも、飯田・下伊那地方においては、中央高速自動車道路の建設に伴う、用地内の埋蔵文化財発掘調査記録保存のため、大規模な調査活動が進められており、本古墳調査における調査員の確保について難かしい面もあったが、幸い各方面の格別なるご援助と、ご指導によって、当初予期し得なかった貴重な結果をみることができ感謝にたえない。

調査団長大沢和夫教授（飯田女子短大）を先頭に調査活動が進められ、調査主任佐藤甞信先生（日本考古学協会）には、困難な事情の中で、終始献身的なご尽力をされ、今日調査報告書刊行に到達できました。その熱意とご労苦に対し深く敬意を表する。又この調査に当って、明治大学大塚初重教授の格別なるご配慮により、明治大学学生、金子真土、松田真一、藤野竜宏、諸君の応援を得、調査主任を助け、若いエネルギーを調査活動に傾注されたその努力に感謝するところである。

今回のこの調査について、各方面から、格別なるご協力をいただき乍ら、ご紹介が、あるいはおちている方もあるかと思いますが、ご容赦いただきたい。ここに改めて謝辞を申し上げる。

尚調査後の古墳保護については、土地所有者小島洋志氏はじめ、周囲土地所有者池沼次郎、佐々木順治、木下庸之助の諸氏等のご理解により、現状のまま、保存できるようになったことは、特筆すべきことでありここに敬意を表する。

昭和47年3月

飯田市教育委員会事務局
社 会 教 育 課



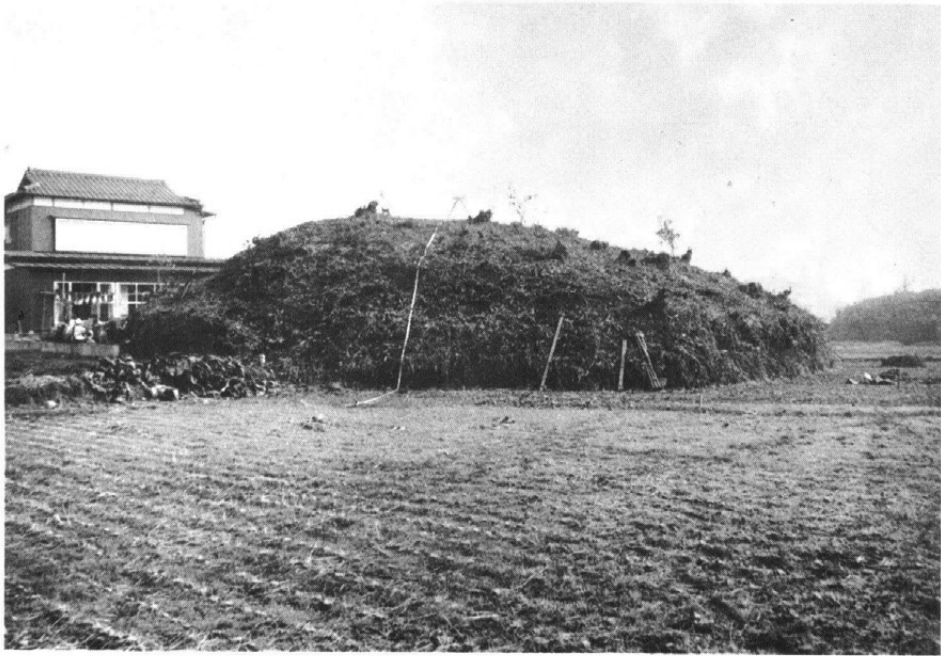
昭和43年の古墳—南よりみた



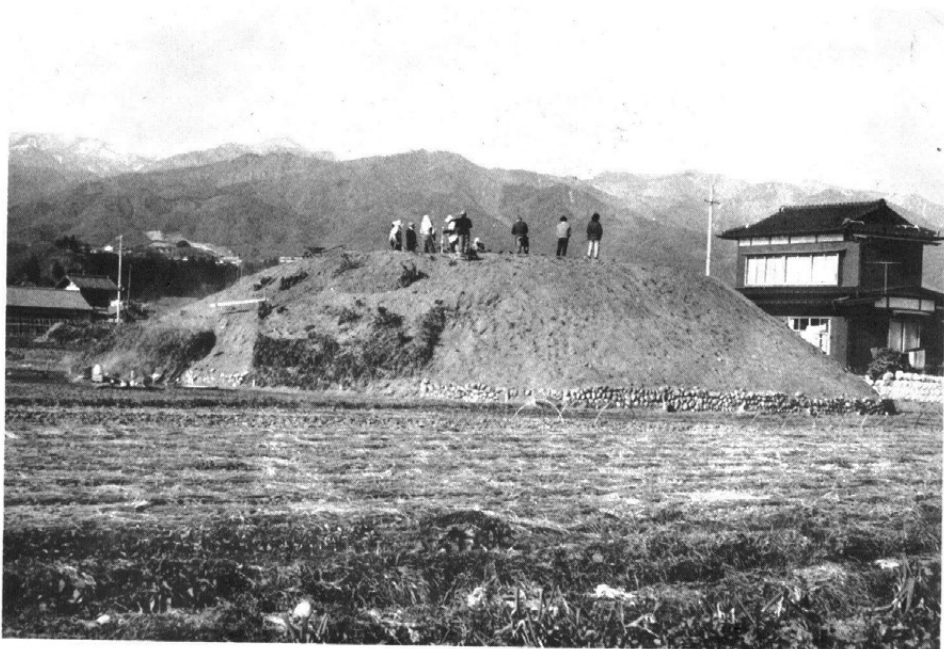
昭和43年の古墳—北西よりみた



昭和45年墳丘の北側が削られた状況



昭和46年11月調査直前—西側より



調査終了後の古墳



南東面のグリッド調査



葺石の検出



葺石の実測



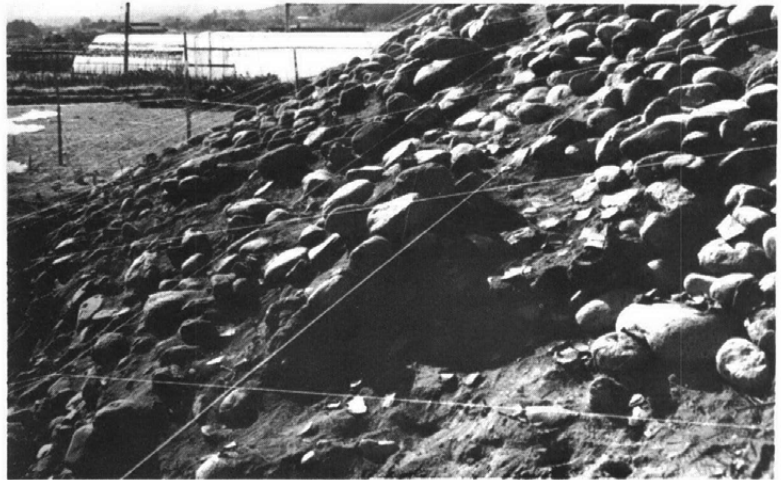
南東面の葺石全景



南東面の葺石一東より



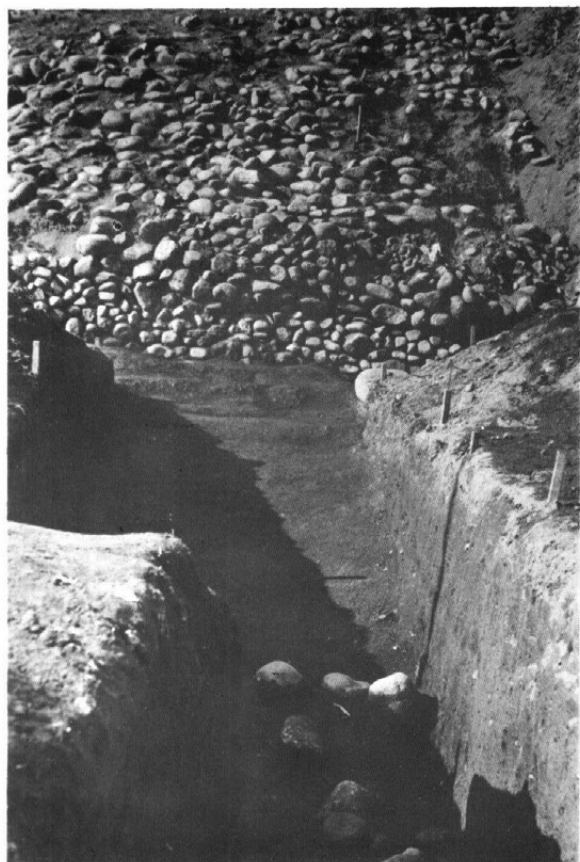
西側の葺石の1部



葺石の間にみる埴輪片



埴輪片の出土状況



周隍の掘られている状況



墳丘の断面 — 南軸



墳頂部の礫と粘土の擲とみる配石—北より

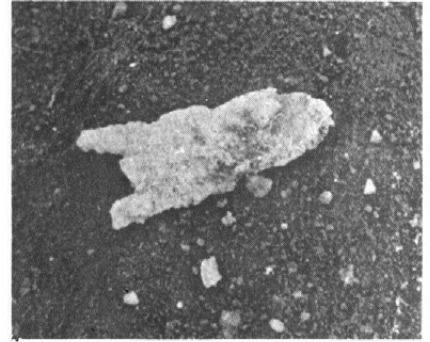


墳頂部の礫と粘土の擲とみる配石—南より

図版V 遺物の出土状況



鈍の出土



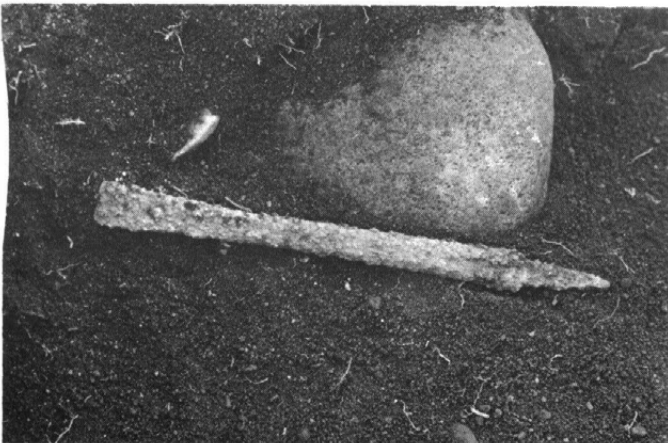
平根鏃の出土



ガラス丸玉の出土



鉄斧の出土



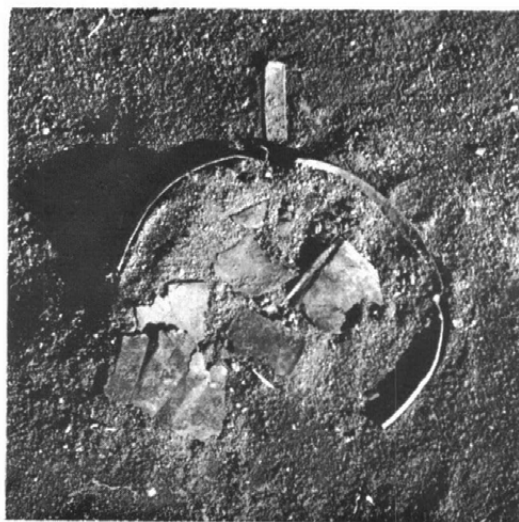
鏃の出土



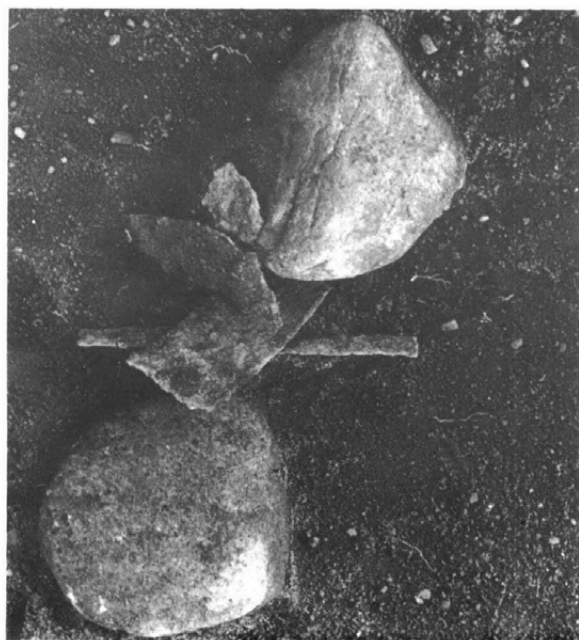
管玉の出土



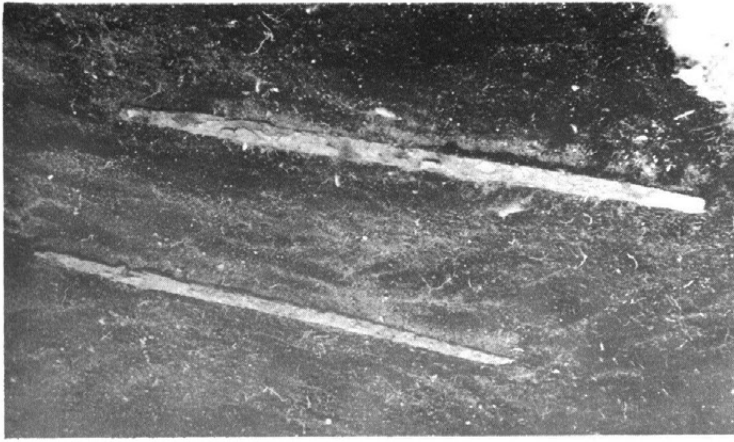
眉庇付冑、矛の出土



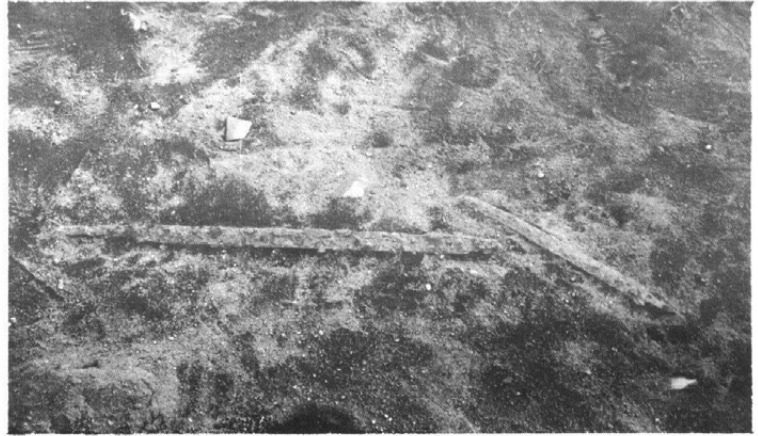
眉庇付冑の胴巻の带状金銅板出土



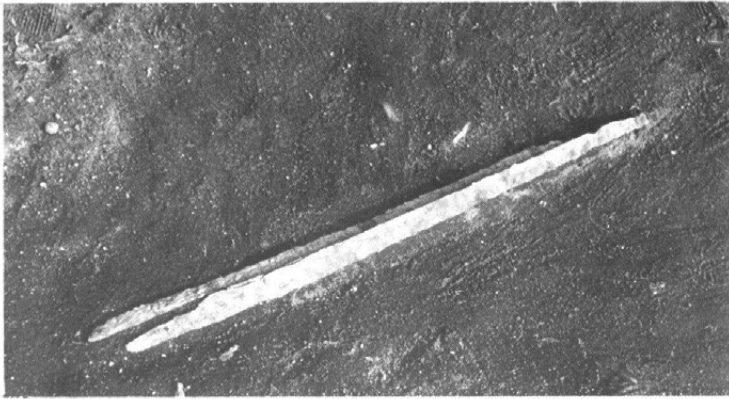
眉庇付冑の鍔部と小形剣の出土



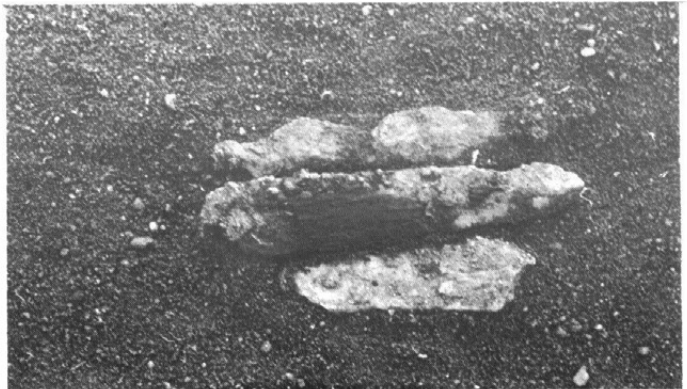
剣・大刀の出土(1)



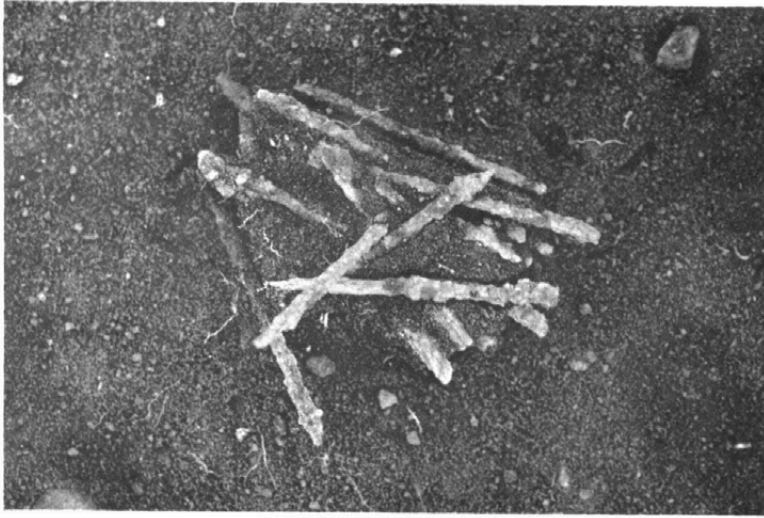
剣・大刀の出土(2)



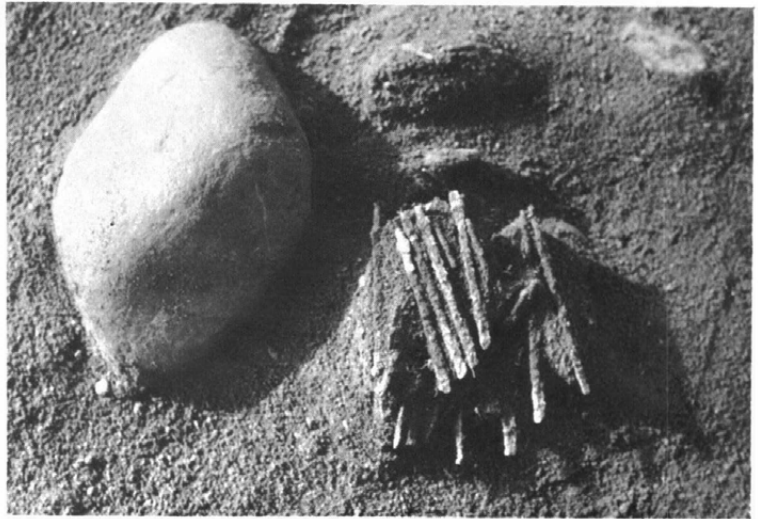
大刀の出土(3)



剣が三つ折れになり並べられてきた。



鉄鍬No. 1 の出土

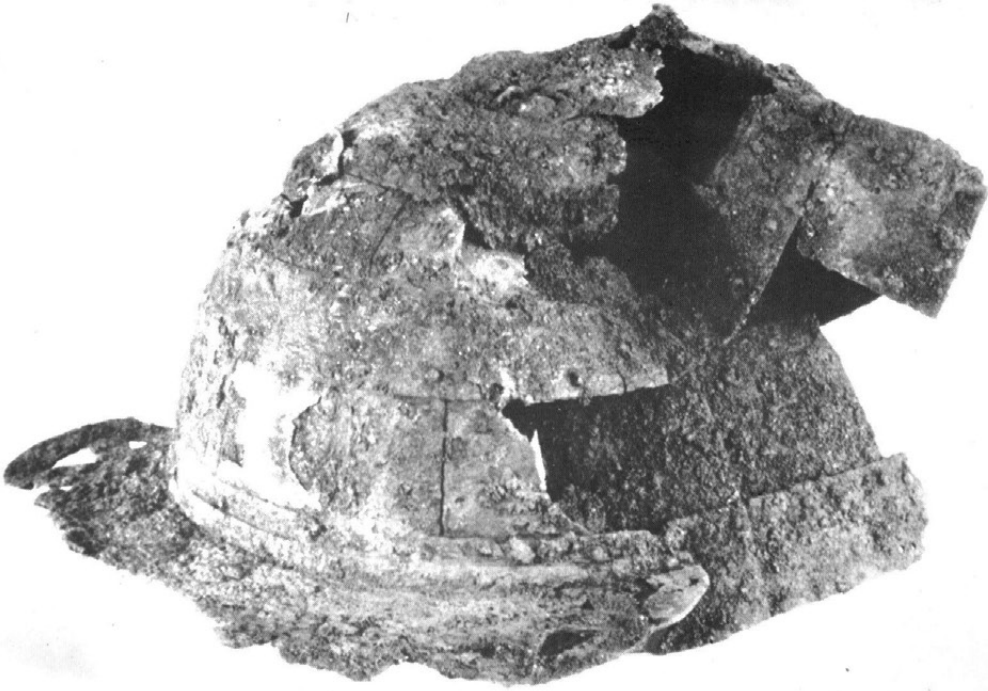


鉄鍬No. 2 の出土

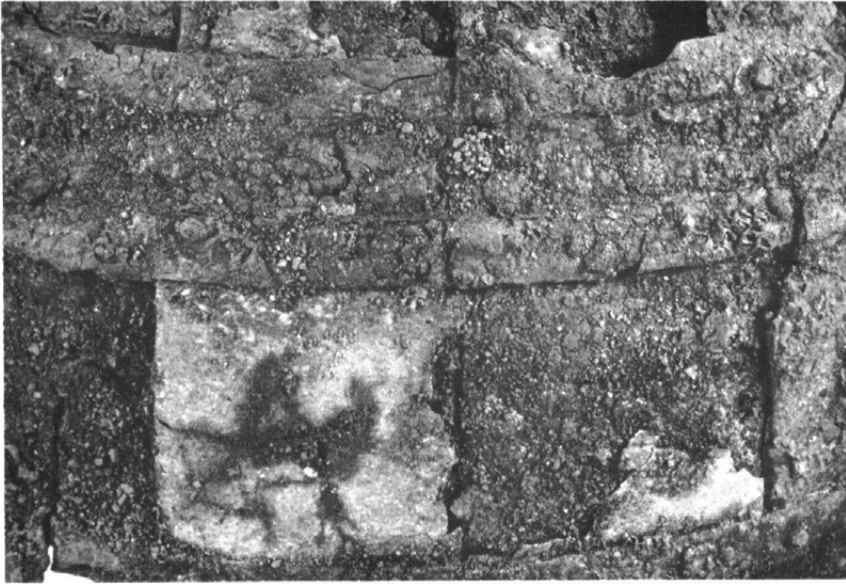


鉄鍬No. 3 の出土

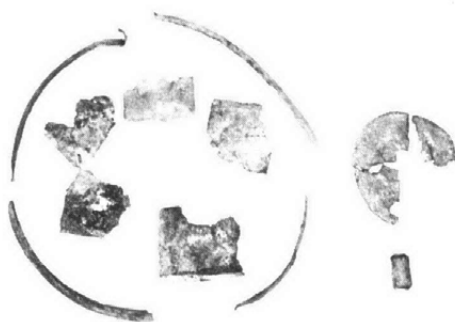
VI 出土遺物



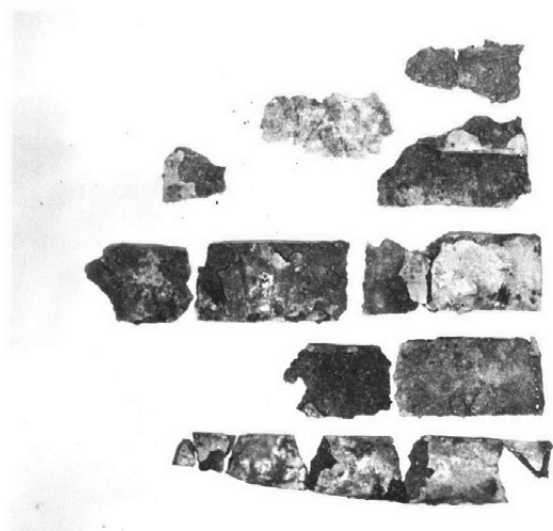
眉庇付冑



眉庇付冑の側面金銅装の1部



眉庇付冑の胴巻金銅板・管・受鉢



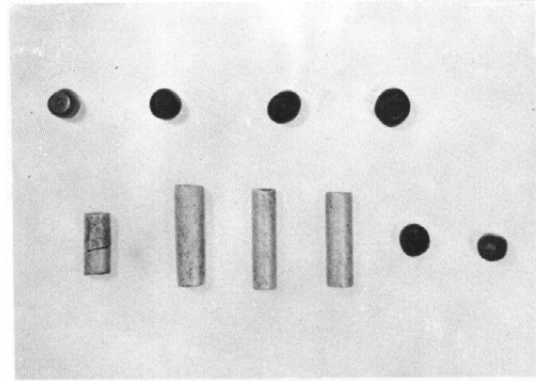
眉庇付冑の鍔の1部 金銅装 下は鍔の右袖



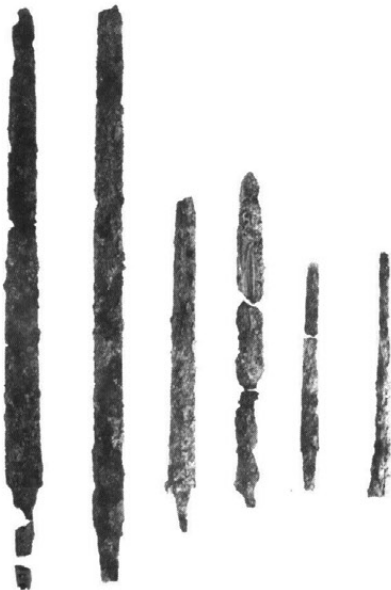
眉庇付冑の鍔の鉄板片



鉄斧、鈍、鑿



ガラス丸玉、管玉



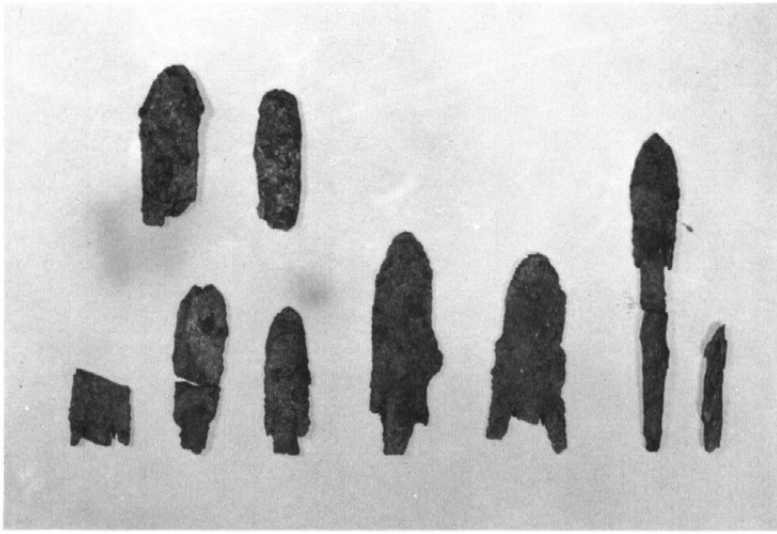
剣、矛



直弧文鹿角装（剣につく）



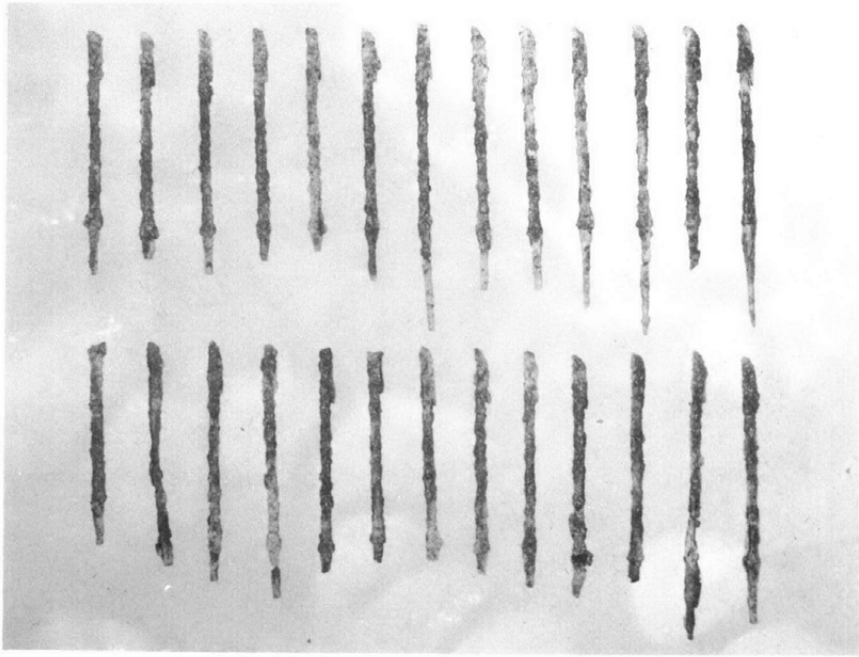
大刀



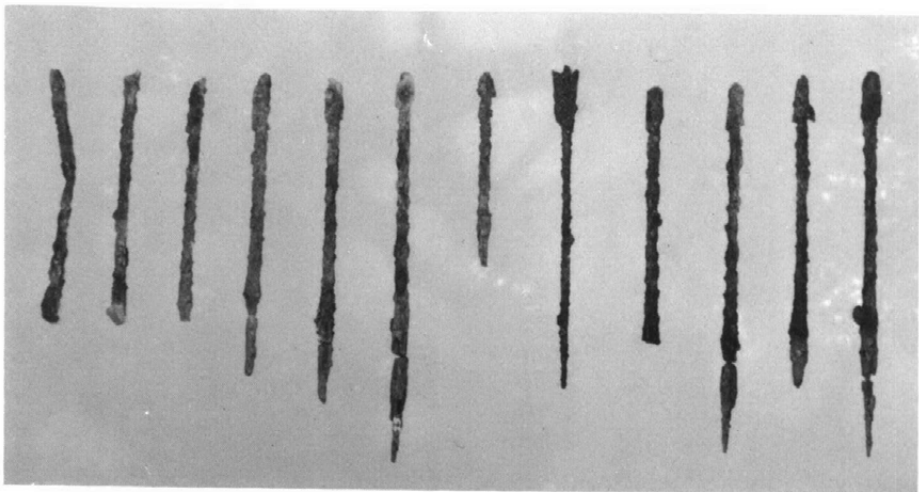
平根鋸



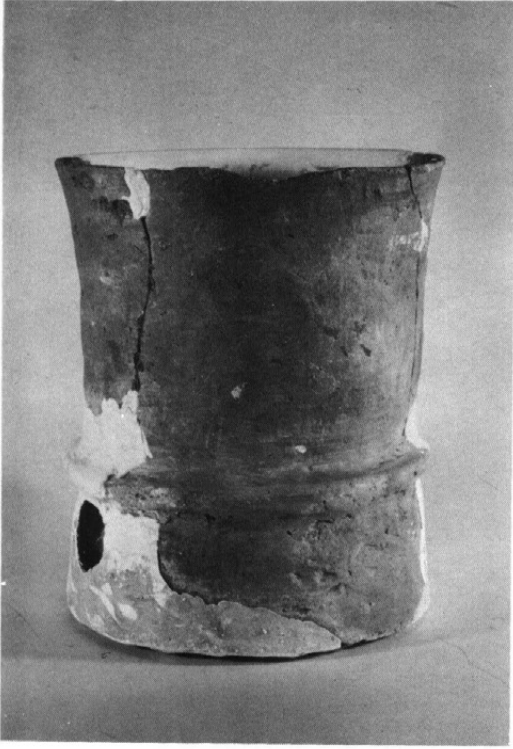
鉄鋸No. 1



鉄鍍.№.2



鉄鍍.№.3 他



埴輪№. 1



埴輪№. 6



埴輪底部片

妙前大塚（3号）古墳

— 発掘調査報告書 —

昭和47年 3月20日 印刷

昭和47年 3月25日 発行

発行者 長野県飯田市教育委員会

印刷所 飯田市通り町1 秀文社
